女鑑

明治三十年七月五日發刊

第百三拾六號

東京國光社

女鑑第百三拾六號 目録

女鑑

論説

史談

家政

學園

漫録

文林

雜報

教の庭

兼題 歌數百首 文數十章

ほかくさぐ

附錄

青栽園眞佐子



高等教育を受くる女子に望む

美はしく優れたる國家は、美はしく優れたる國民より成る。美はしく優れにたる國民は、もと、其の人種の氣質にも、其の山川風土にも、其の風俗習慣にもなほ、さま〴〵の事情にも因ることなれど、且つは、美はしく優れたる教育もてこそ養ひ作らるゝものなれ。

されば、一般に國民の教育の益々美はしく優れたらむことは、吾も人も、もとより喜ぶ所にて、我が國の女子が高等の學校に入りて、美はしき教を受け、優れたる道を學ぶと云ふ事は、吾人は決して喜ばざる者にあらず。否、なか〳〵に、是非に一般の女子にありたく、吾人が實に喜び、切に望む所にこそあなれ。これ、やがて、一般の女子をして、美はしく優れたる我が國の、美はしく優れたる國民な

らしめむことを欲すればなり。

女子の高等教育や、まことに善し。吾人は、わが姉妹がます／＼高き道をわけ、美はしき教をうけ、いよ／＼美はしく優れたらむ女子とならむことを、朝夕に祈る者なり。されど、姉妹よ。吾人は、姉妹が高等の教理に進まむことを祈ると共に、また、別に姉妹に向つて祈る所のものあり。そは、姉妹か高等の教育をうくるや、實に、才に徳に、心に行ひに、高等なる完全なる優美なる活きたる女子と成りて、決して空しく名ばかりなる、やがて、なか／＼に高等教育を受けたる不具者、死物の女子とはかり成らざらむ心懸けをこそ祈るなれ。

彼の美服を着るをのみ知りて、さて美服を縫ふをえせず。或は西洋料理の法さへに知りて、反て我が朝夕の食物を料理する能はず。或は椅子に脚をのばす事を好めど、わが疊の上に靜坐するを好まず。或は能く交際場裡に出で入りすることは知りたれど、片時も我が家を守る事を知らず。或は袂長くひき、袖ゆらゝにかへしてはあれど、絶えてやさしき女子たる振舞は見えず。或は高等の修身倫理を云

ひも聞きもしながらに、なか〱に、父母に良人にまめやかに、兄弟に我が子にやさしかるべき、世のつねの子たり妻たり母たるばかりの務めを知らず。或は月花に演劇に音樂に遊び樂む事を知れど、父母の爲め良人の爲め子供の爲めに勉め營む事を知らず。或は奢ることは知れゝど、財を貯ふることは知らず。或はおはれなる歌をよみ文を書きちらせども、まめやかなる心は露ばかりも有たぬなど、今の世に云ふ高等教育を受けたる女子の中に、吾人が折り〱見もし聞きもする怪しき人物は、皆、やがて、此の高等教育を受けたる不具者なり。死物の女子なり。如何となれば、かゝる者は、高等の教育を受けながらに、高尚優美なる觀念もなく思想もなく振舞もなく、高尚優美の女德を具へざる不具者なればなり。而して、斯の如き者は、世に用なき者なれば、一片の死骨のみ、一塊の死肉のみ、故に死物の女子といふなり。

高等教育を受けむとする姉妹に向つて、吾人が祈る所は、實に斯の如き不具者死物とならざらむことを祈るのみ。而して、かゝる悲しむべき不具者と成るは、且

つは女子の本分を忘るゝが故なり。女子が高等の學問を爲す本旨を誤れるが故なり。

且つは、學校の如何にあり。女子の本分、女子の研學の本旨は、吾人が嘗て幾度かわが姉妹につげたるあれば、こゝには再びせざるべし。學校の如何は、事多ければ、他日を待て論せんとす。



論説

愛國編

高島平三郎

神皇正統記に曰く、「大日本は神國なり。天祖はじめて基をひらき、日神ながく統を傳へ給ふ、我國のみ此事あり。異朝には其のたぐひなし。此の故に、神國といふなり。」

我が國の萬國に勝れたるは、啻に此事のみならず、山清く水明にして、不毛砂漠の

地なく、百禾豊熟して餘りあり。時候は寒暖中和を得、萬の物具は足りて、外に待つことなし。我國の人は古より忠勇無比にして、外國と戰を交へて、未だ一度も破れをとりたる事なし。

實に我が大日本國の如く、萬代不易の君主を仰ぎ奉りて、かゝる美しき土地を保てるものは、廣き世界にも其のためしある可からず。

かゝるめでたき國を受け繼ぎたる國の民は、益々此の國を榮ゑさせんことをつとめずむある可からず。此國の榮を望むものは、實に此の國をめづる人といふべし。

國をめづる人は、先づその國を敬ひ尊び、その國の政事に從ひ、その國のつひゑを資け、その國の守りをつとめざる可からず。

我が大日本は、上に萬代一姓の君主おはしまし、法を立つる司、法を行ふ司、法を司る司、おのおのそなはりて、永く此の國に傳はれる、うつくしき風俗習慣によりて成れる國なれば、國を尊び敬ふものは、先づ君を敬ひ尊ぶ可きなり。

我が大君は、むかし皇祖天照大神の、皇孫天津彦火瓊々杵尊に勅して、「我子孫主たるべきの地なり。爾皇孫よろしくつきて治めよ。寶祚の隆ゑまさんこと、まさに天壤ときはめなけん」と宣ひし如く、神代より正理にて受け傳へ給へる、あやにかしこき大君

にましませは、異國の王の異姓のもの、相簒奪して、立てるが如きたぐひにはあらず實にもたふとき事にこそあなれ。

神皇正統記に曰く、「天地もむかしに變らず、日月も光りを改めず、況や三種の神器現在し給へり。究りあるべからざるは、我が國を傳る寶祚なり。仰ぎてたふとみ奉るべきは、日嗣をうけ給ふ皇になんおはします」と。

山はさけ海はあせなん世なりとも君に二心吾あらめやも

天皇は現世神なり秋津島うごくべき世のあらんと思ふな

日の本は天つ日つきのみことのりあめつちの共きはみあらめや

又、我が國の政事は、すでに憲法をも立て給ひ、國會をも開かせ給ひ、立憲帝政といふ、いと美しき政體となりて、百のつかさ、みなそのつとめをはげみ、ひとしく國つ民の利益を圖れるなれど、此の國憲も、之を司る司人も、共に尊び敬ひて、假にも之を蔑にするの心ある可からず。

我が大日本には、古よりおのづからなる人の道そなはりて、震旦の聖のいはゆる、五倫五常によくかなへり。是等の美しき道は、風俗となり習慣となりて、傳へて今日にいたれるものなれど、人々皆此の國の風俗習慣をぞ愛重して、みだりにみづから之を

いやしみ、之を罵るが如きことある可からず。

國つ民として、その國の君主、その國の政令、官人、その國の風俗習慣を敬ひ貴ぶべきは、誠に大切なる務といふべけれ。

又、國の政には、かしこみて之に從ひ、之を守ること、愛國の要道なり。政は、國を治むる大本なれど、國つ民とし此の政を蔑にして、從ふを背んせざるときは、何を以て立たんや。前にも述べし如く、我が國は、己に代議の政体となりたれど、民に不便の政は、帝國議會に於いて、飽までも之をあげつらふことを得るなれど、必みだりに之をそしり、之に背く事ある可からず。

國を保つには、多くのつひえをもとむるものなれど、國つ民は、くさくさの定まれる租税ををさめて、此のつひえを資けずどある可からず。是、亦、國をめで、國に盡す、要道なり。

我が大日本國は、二千五百餘年の間、世界萬國の上に卓越し、外の侮を受けし事なきいとめでたき國なれども、未來は定めなし何時敵寇の來らんもはかり知る可からず。されは、國つ民は豫、是等の覺悟なかる可からず。

我が大日本の版圖は、ますます其の界をひろめ、我が大日本の人種は、いよいよその

員を益して、遠き國のはてにまで及ぼすべし。國つ民たるもの、啻に外敵の侵入をふせぐのみならず、又正理をふみて、是等の事を遂げんの志なかる可からず。國を守り、國を防ぎ、國のみいつをひろめんには、多くのつはものと、なべての國つ民に、まことの國をめずる義氣ある事肝要なり。されば、國つ民は、徴兵に出づるをば、身の譽とし、喜び勇み之に赴くべし。正しき道にあらずして、之を忌み、之をさくるは、大和心あるものゝしわざにはあらざるなり。我が大日本人種には、むかしより大和心とて、一種萬國にすぐれてけだかきまごころありて、此の國のかためとなれり。されば此の國に生れんものは、此の心をうけつぎて失はず、ますます之を擴ろめんことをつとむべし。

敷島の大和心を人とはゞ朝日に匂ふ山櫻花

我が日本の國つ民たるものは、もし外寇の來り侵す日あらば、財産生命、すべて此の國のために拋ちて、毫もをしむ心ある可からず。二千五百年來、外國のために、はづかしめられたる事なき、我が大日本の國つ民は、我が國の危急の日にあらば、生きて外敵の侮らにあはんより、寧死して忠義の譽を萬代に傳へんこと、豈快からずや。

千萬の寇はくるとも我のかしのはかいははと共にとはなん

君のため世のため何かをしからんすてて甲斐ある命なりせむ

凡そ國つ民は、皆、此の國のはまれのために、常に正義を守りて、假にも不正不義を以て、外に交る可からず。又外の不正不義を受く可からざるなり。

國つ民は、私の交りにも、國と國との交りにも、正義を貫かんこと、此の國の品位をけだかくし、外つ國の敬ひを受くるに大切なる事なり。

國をめづる心は、常に戰を交ふるの日に必要なるのみならず、平和の日にも、おのれのその國の美をなさんことを思ひ、己の業をはげみて、外つ國にまされる學問技藝をなし遂げんこと、いづれも大なる報國なり。外つ國に美しき事物あらば、我は一しは之にまさらんことをつとめ、我が國の事物を改め進むること肝要なり。徒に外つ國を嘆美し、之になぞらへて自ら喜ぶは、誠にいやしむべき心さまにして、是、國を亡ばす傭をなす者といふべし。

女子教育一斑（四十四）

三輪田眞佐子

第六　純潔　世人の所謂美をば、俗美と雅美とに類別するを得んか。彼の紅紫燦然として人目を奪ふばかりなる人工の美は、華奢に近きをもて、俗にぞある。さりながら、

純白高潔にして、一片の塵なく、一點の邪なき天然の美こそ雅なれ。あはれ、誰か雅を棄てゝ俗を好まん。故にれのれは、女子の美育に於て、俗美を言はずして、雅美を言ふなり。

陶淵明の詩に、采菊東籬下、悠然見南山、山氣日夕佳、飛鳥相共還、此中有佳味、との句あり。こは、純潔の美を歌ひしものなり。なべて俗美は、これに眩惑して、こを感受すること易からんも、雅美はこれを鑑識して、これに同化すること難し、されど、讀者俗になずまずむ幸なり。

果して純潔の美を感受して、これを日時の女事に應用せんときは、節儉の道をふみながら、高尚優美の生活をなすを得ん。たとへば、垢じみたる綾羅の衣よりも、清潔なる綿布の服こそ反りて雅ならめ、その他住宅の裝飾、言語の使用等、一切高雅にせんとならば、純潔の美を養はざるべからず。今や世は奢侈に流れ、いと憂ふべきを、なは美育を誤想して、華美の風になびかんか、國家の前途如何ならん、あはれ。

さて、純潔の美を養ふ方法は如何にすべきか。先づ境遇を純潔にすべし。れもふに、朝な夕な行ふ室内の掃除、及び調度の整理など、精しからざる女子は、おのづから、一般の品格も、これに準じて墮落するものぞかし。されど、つねに純潔ならざる習慣

を避くべし、若、習慣純潔ならざるときは、勢ひ嗜好卑野ならざるを得ず、從ひて俗美を尊ぶに至るならん。

凡そ美は、耳と目とに感ずるものにして、苟くも審美力を養ふには、視覺等に由るべきものならんも、聽覺等も、歸着する所は、心にしあれど、美育も、精神敎育の一種に過ぎず。されど、就中純潔の美は、德の一種とも見るべきものなれど、いつもながら精神を純潔にせしめんことを勤むべし。すなはち、人沐浴すれど、必、衣冠を拂ふ、精神察々たるもの、などか汶々たる事物を以て安んせんや。古人は、勝母の地を過らず。あるは、朝歌の里に入らざりしとかや。そは、心を純潔にせんための工夫なりけん。女子かゝる見識を抱きて世に處せんか、必、攝身純潔なるべし。故に、女學校に於ける修身の科は、美育の上にも亦大なる効力ありなん。

なほ。有形上の方法につきて言はゞ、香をきく如きは純潔の美を養ふに最も適せんか、こは、むかし、女子の美育に專ら用ゐしものなりけん。又、書法は、本來、實用上欠ぐべからざるため習ふべきものなるは更なれど、その端正、及び流麗るなやうつとむる點より見れど、美育にも助成の効能ありと言ふも可ならん。

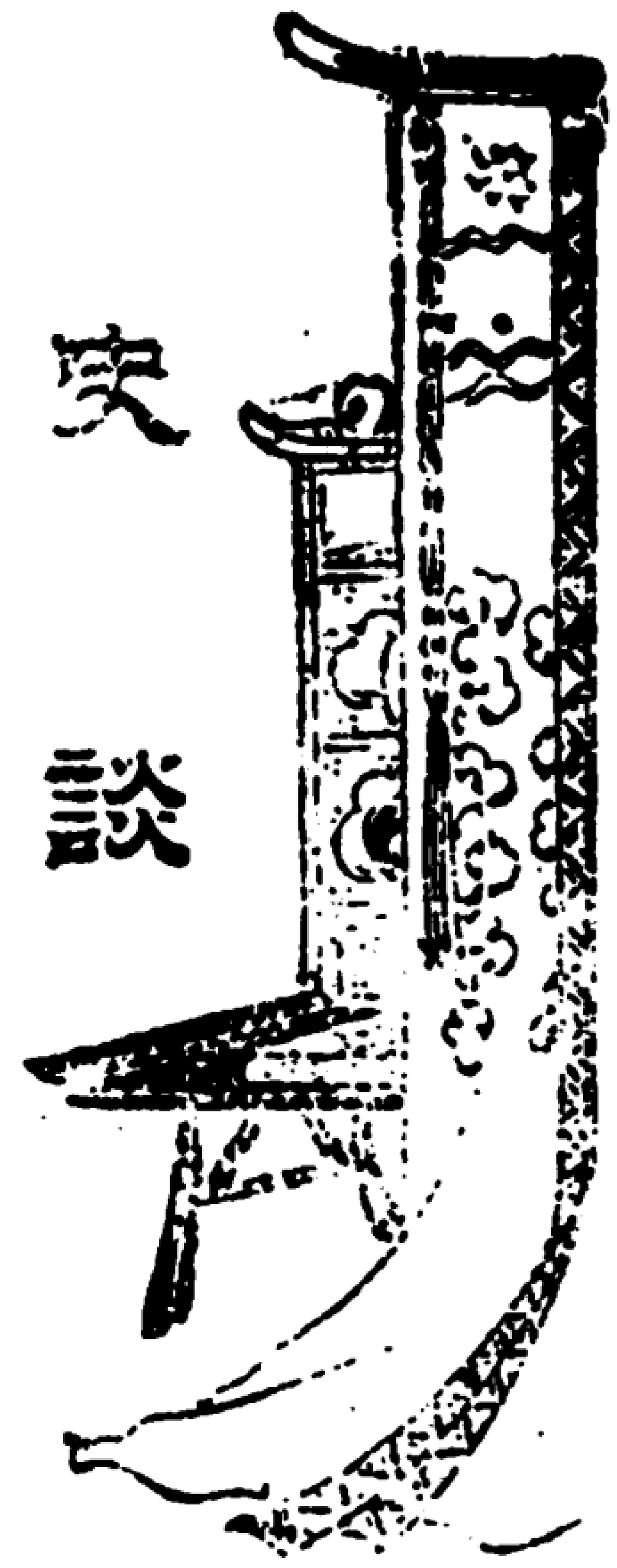
以上述つる六つの事項を、實際、且、適度に應用せど、女子普通敎育につきての美育

はは〻足らんかし。

美育とし言はゞ、新しき思想なるかと問ふものあらんかなれど、こは、決して西洋に習ひてにあらず、寧ろ、往時の女子敎育は、專ら美育のみに偏せしとも言ふを得べきほどなり。枕の草子に、村上の御時、せんようでんの女御ときこえけるは、小一條の左大臣殿の御女におはしましけれど、たれかは、えきこえざらん。まだひめぎみにおはしけるとき、父大臣のをしへ聞えさせ給ひけるは、一には御手をならひ給へ、つぎには、きんの御こと、いかで人にひきまさらんとおぼせ云々とあり。なは、從來、女子のために世に出し書冊を見よ、美育を忽にせしもの、をさ〳〵あるまじ。

終に一言せまほしきは、おのれ、女子に美育は肝要なりと信ずればこそかくものしたりけれ。されど、若、世人、美育の目的を誤りて、たゞ柔弱にして女事に堪へず、將た遊惰にして歲月を費すなど、國家の目より見れば、有害の業を行ふを以て、美育に伴ふものとせんか、美育なるもの言はずもがな。そは天下後世の譏を免れざればなり。さいつころ、子爵品川先生、おのれに賜られける書翰の中に。一人にても國家と申すことの精神に御養成有之度、後來のために願上候云々。おのれつねに、先生の高訓を服膺せんとつとむるものを、若、青年女子、國家のため無用の長物となりながら、口

質を美育に託せんか、あはれ何の面目ありて先生に答へん。讀者、れのれの眞意を探りてよ。



史談

青義園眞砂子の傳

鹽井ふく子

六尺の孤を託さるゝはよく〳〵の女丈夫ぞかし。眞砂子と云ふは、京都青山と云ふ處に住む小島何某と云ふ士人の妻女なり。酒掃紡績の業は云ふも更にて、學問にもすぐれ、武術も心得、和歌狂歌などもよくしたり。かつ、志雄々しくて、義を守る事金石の如かりしを、知る人ぞ知る、近きはとりに住みける和學の師、はやも七十路を越ゆける何某といふもの、日來眞砂子と親しかりけるが、眞砂子の心の誠あるをよく〳〵知りてか、ある時、一人の童子を伴ひ來りて、眞砂子に云ふよう、此童はもと澤となん呼びける尊き武士の子なりけるを、不幸にも孤子となりて、今はいやしき家の養子と

なり居りぬ。おのれも少しくゆかりあるものなれど、如何にもして今一度世に出させまほしう思ひ、日頃少しは文の道をも心にかけて講じきかせぬる事もありしかど七十路の翁、此頃は殊に老い朽ちて、明日にも知らぬ心地なん、おのれなからんには、また此の子を敎ふる人も絕えて、いやしき商人となりはてんと思ふろ口惜しき。さるは、御身が雄々しき御心をかねて知り候へは、我がなからん後、此子の敎育たのまんとて參ゐりたり。願くは、夫人、あはれみて折り〳〵敎へられて人となし、のちにやんことなき方にめし出さるゝか、はた公につかふまつる人ともなりて、親の名をも、己か名をもあらはすまでは、ともあれ、有道の子となるやう心をかけ玉はらむ、草葉のかけの心も安うなんと涙をこほしてたのみけるに、誠に自らは女子にて、御頼みの甲斐もなくや侍らん、されど師の君の御たのみ、身にかへても日來の御恩に報い侍らんと思へた、ともかく御心安く、なは百歳を過ぐさせ玉へと、よにたもしけに答へけるに、老師は老いの淚をしぬひつゝ、くりかへしたのみ聞ゑて歸りけるか、幾程もなくみまかりけり。眞砂子は、また昨日今日とは思はざりけれど、いとゞうら悲しう、七日か間は一間にこもりて、飲食もはか〳〵しくはものせさりけり。

さて、その後、かの童子を呼び、我が身、先きつ日、いやしくも故師の君に御身がこ

とを頼まれ侍れど、及ばずながら身にひきうけて、後見聞ゆべく、我が身の云ふ事すべてわしうな思ひそ。御身も早く兩親を失ひ、人の養子となれど、心にまかさゞらん、されど、一心凝れば岩をも通すとき〻侍る、必ずひま〳〵には心がけて、いにしへのかしこきひじりの道を學び玉へ、武術の道をもと思へど、それも叶はざるは口惜しき事にはあれど、心強くもまた何かあらむ。たゞ何事も心をいさぎようし玉へなどさま〴〵敎へ、さてそれより心にかけて、敎へ導きけるほどに、その童も人となるに從ひて、才かしこく、手なども人に越ね、文の道わかるくなるまゝに、流石の武士の志失せで、商人の家に育てられながら、人にへつらふ事をきらひ、思ひにまかせて、人とあらがひなどするに、近きわたり、此の子をそしる人多く、あるとき眞砂子の知己、此子に云ひくじかれたるが、一日、眞砂子の家に至り云ふやう、貴孃がつねにいつくしみ玉ふ童は、近頃なまもの知りになりて、やゝもすれど、人とあらがひ、云ひくだす事の憎くさよ、されど近きわたりの人の許も宜しからぬを、御身はいつまで情かけ玉ふ。此の後は固く交はりを絶ち玉へなど云ふに、眞砂子答へけらく、さる事の侍りけるにや、此程より彼の子をそしる聲の折りふし聞ねけるが、ろうじて人は母の胎内より博識の人にて生まるゝものはなく、やうやく年を重ね、學をつむに從ひて、一度は

なまもの知りとなり、そが上にもいよ〳〵學び〳〵て、遂には博識の人となるものなり。彼の子もさる理にて、まして、幼きより兩親に別れ、商人の子となり、名をすて、利を求むるものなるに、かつ〳〵書をもとめ、ものゝかげにてよみ覺え、夜をおかして習ひたれどこそ、なまめづらしうも覺えてならん。されど此のなまもの知りになりたるは、いみじき彼が功にて、朝に道をきかば、夕に死せんも可なりと孔子もの玉ひ、またある人の狂歌にも「論語よみの論語知らずはなはよけん論語よまずの論語知らずとは」とたわれよまれしも、誠に經驗ある人の言にて、學識の少しもあらぬをなげきてより、かくは云へるなり。畢竟、童子に云ひくだかるゝは、學問のあらぬ故にて、彼をおながちにそしるは、已れにへつらふ人をよろこぶ小人か、さらすは人の才を憎くむ佞人なり。さるは、貌よき女を惡女のにくむに異ならす、つゝしむへき事にこそ。何はとまれ、彼の童は、已かもとに來り、妾を曲けくだせし事未た一度もあらねは、妾はいかて交はりを絶ち、出入を禁せんやと、へつらふ色もなく云ひけちけるに、そしりける人はいたく耻ぢて歸りにけり。その後、眞砂子は彼の童を呼び、妾、かつて師の君にたのまれ侍れど、如何にもして君を賢人となして、師の御惠の萬分一かへさまほしと思へど、朝夕神佛にいのり、御身に過のなからん事を願ひぬるに、此の頃御

身は、人ととかくに物あらかひし玉ふよしにて、我が家へ來るものまた御身をそしるもの少からす、すべて智者は人をそしらす、そしるは必ず其の人の智の足らはねばなり、されど、足らはぬ人ともの爭がひて勝つとて何かはせん、それもいはゆる智の至らぬなめり。されど、御身より智の足らはぬ人と思はゞ、たゞ路をゆく犬、無禮を加ふるものあらば、それは蠅、彥蠅、世の虫よとむかし木村長門の守がたもたれし忍耐心をもち玉ひて、必ず心にかけず捨て玉へ、かくだにせば、さばへいつまで禍せん、秋はつるまゝになくなり侍らむ、此の言葉をきゝ入れず、なはみだりに人とあらがひなど、いつかは禍のはしどもなりて、身をあやまつ事ありなん。さりとて、へつらひ玉へと申すにはあらす、何事も心をれさへ玉ひて、なはよく博識多才の人につきてよろづの事をときあきらめ、世に名ある人となり玉はれ、已れもうれしけれど、女の身のかしとがましくも申きこゆるなりと、ねんごろに說き悟したりしに童子もいたく感じ、涙を流して之より必ずつゝしみ申すべしと答へて退きけるが、其後はまた才がしこがる事も、人とあらがふ事もなく一すぢに書をよみ、手を習ひけりとなり。げに聞かまほしきは、誠ある人の敎へにて、人の誡に速に從ひける童子の心もまたあらまほしき事なり。さるにても、眞砂子の如きは、然諾を重んずる烈女と云ひつべし。

青柳の一樹の陰もたのまれず一河の流れくまぬ玉川

とは、眞砂子、かつて、高野玉川にて詠みし狂歌なりとぞ。なほ多きよしなれど、知らざるぞ口惜しき。

麻生りき女傳

五十園德文

りき女は上總の國、大多喜町(夷隅郡)の人庄吉といへるが妻なり。近き隣村なる正立寺村の農某が女にて、よきほどに人となりて、こゝに嫁けるなり。この庄吉といへるは、をさなくして父をうしなひしかど、母の手に養育せられたりき。家もと貧しくして、烟もたてかねしかど庄吉おもひけらく、妻を娶りて母のみとりをせさせ、おのれはひとり都にのぼりて人にやとはれて、その給分をもて母の奉養の料としてんとおもひたちて、さてこのりきをぞ娶れるなりけり。かくて都に上るとて妻をいましめていへらく、汝よく母のみこゝろにたがはず、おつることなくみとりをせよとをしへて立ち出でき。りき女心すなほにしてその教にたがはず、朝夕につとめしまりて、よく姑に事ふ。姑つねに酒と蕎麪とを嗜みしかど、おのがつとめて得たる料をもて、日毎にかひとゝのへては進めてこゝろよからしめき。又郷の俗とて、嫗ども相集りて念佛する

ことあり。この折々には、りき女必ゆきゝに姑を背負ひておくりむかへをせり。かくつとめながら女の手ひとつに今日をすぐして、都より夫のおくりおこせたる金員をば、いさゝかも費やさずして、ことゞゝく親戚の人のもとにあづけおきて、後の日の事あらん折のそなへとせり。さてあるほどに、姑病にわづらひき。りき女心をつくして看護に怠りなく、晝夜となく帶をとく暇だもなし。きるもの食ふものよりはじめて、藥を煎なでさすりをするまで、手のとゞかぬくまもなかりき。姑よはひ七十路あまりまでかたぶきにけれど、そのかひもなくて遂にうせにき。りき女かなしむことかぎりなく、あしたゆふべとなく、ものなどそなへつゝ、生けりし時にかはらず。人みな感せざるはなかりき。いくほどもなくて都なる夫亦病にかゝりて家に歸れり。りき女また更に心をはげまして、はげみつとめながら、看護姑のやめりし時にかはらず。力のかぎり療養怠りなかりしかども、病遂にいえずして、寛政の十年戊午の四月二十一日といふによはひ四十四にてみうせき。りき女なげきになげきをかさねて、うつし心もなく月日をすぐしゝが、おなじき年の七月十三日またやみてにはかにはかなくなりぬ。時に年三十九なりし。子はなくて家もたえたり。見るものとなく聞くものとなくそしみいたまざるはなかりき。りき女この家にとつぎてより、こゝに十年あまりがほど、

骨身をくだきてはげみつとめ、老姑を奉養し家ををさめてくちをしからず、人と交はりてもかつて一度も人の心にさかはず、かたくおきてをまもりて、公事をおろそかにせず。隣里みなその徳になびゝき。後行状藩主にきこえしかば、いたくほめて人に命じてその絶ゑたる家をつぎおこさしめ、はた文臣におほせてそのありしよしをかきとりて、碑にものせさせたりきといふ。りき女嫁して家は貧しく、夫は他郷にありて、女ながら家ををさめ、かたくみさををまもりてかはらず。老姑につかへてその心をよろこばしめ、後夫のやめるに身をつくして、遂に家もたゑぬるに至る、かゝるあひだにも、孝貞ふたつながら全かりしは、すぐれたる婦といふべし。こと藩主にきこえて褒賞を賜はり、あと千歳に朽ちざらしめらる。世は不幸におくりしかども、面目はなか〳〵にこよなしといふべしかし。

おのれこの孝婦のことをきゝて年ふることと久し。このごろゑさらぬことありて、故郷大多喜にかへりぬ。いさゝかいとまをゑたれど、語つたへたる物がたりを聞き、はたなにくれとかむがへて、かくはものしつ。藩の文士渡邊稍といへる人の漢文にてものせし墓誌銘一篇、町村誌といふものにのせたり。今おほかたはこれによりつ。大多喜はもと大多喜城のありしところにして、ふるくは伊北館などいひて東鑑など

にも見えたり。建久年中に和田義盛はじめて館し、後里見の老臣正木某こゝに居り徳川幕府のはじめには、本多忠勝こゝに居りき。後代々をへて、大河内氏に至れり。今の子爵大河内正質は其の後なり。この孝婦のすみし家は今の新町といへるあたりにありきといふ。

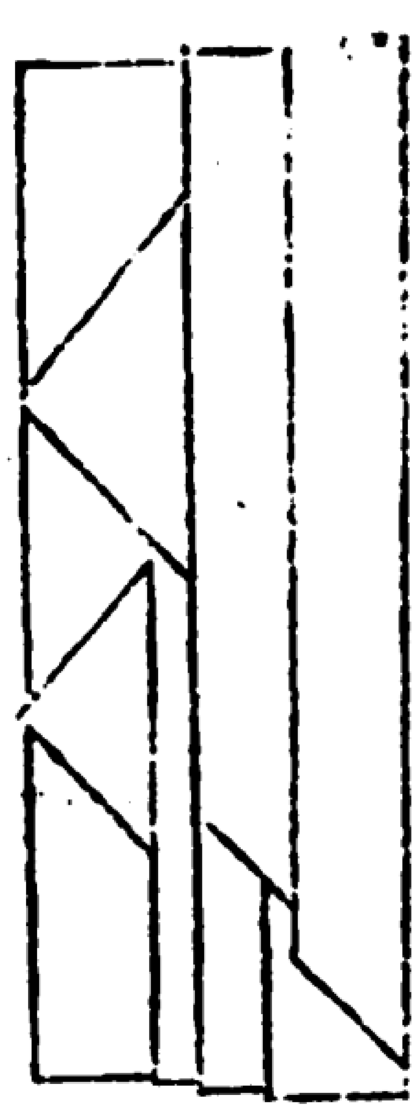


家政

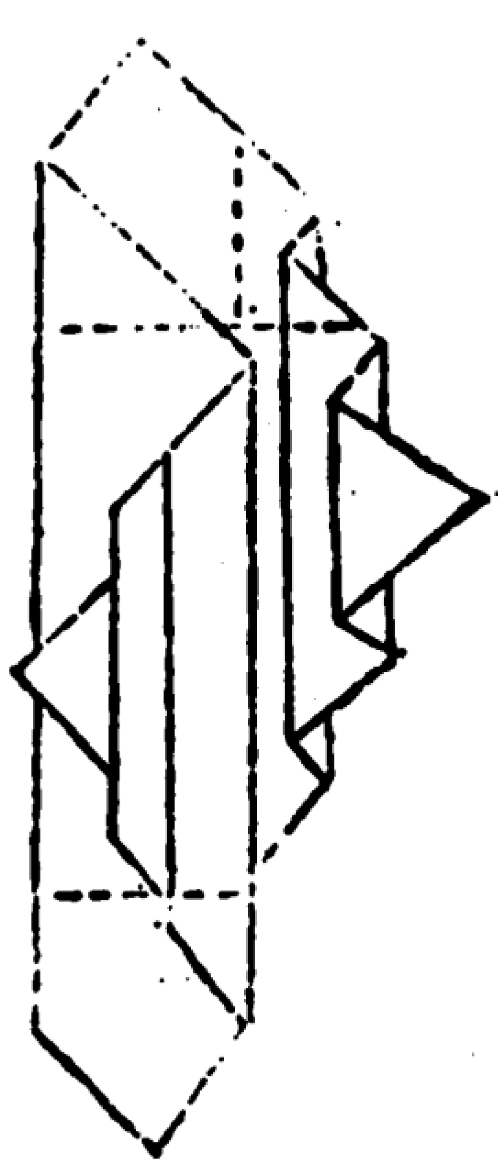
折形

有住齋

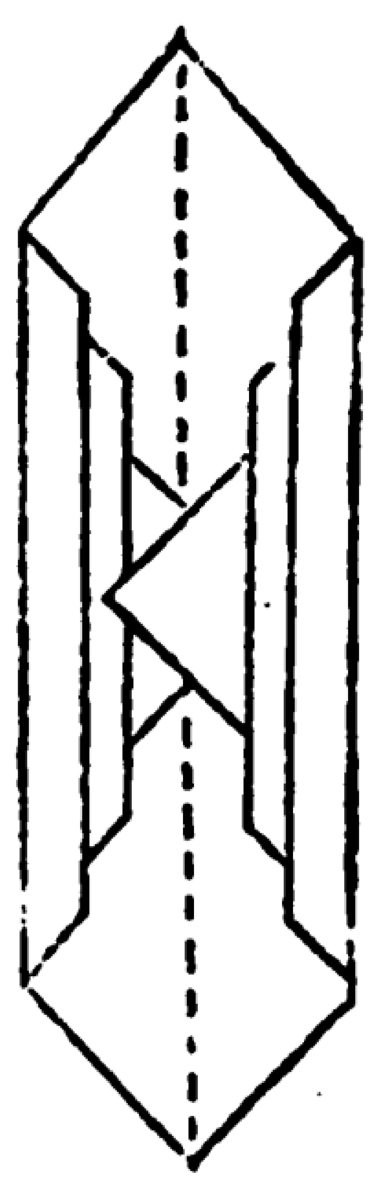
筆、墨包。書附あり。下包なし。



仝解

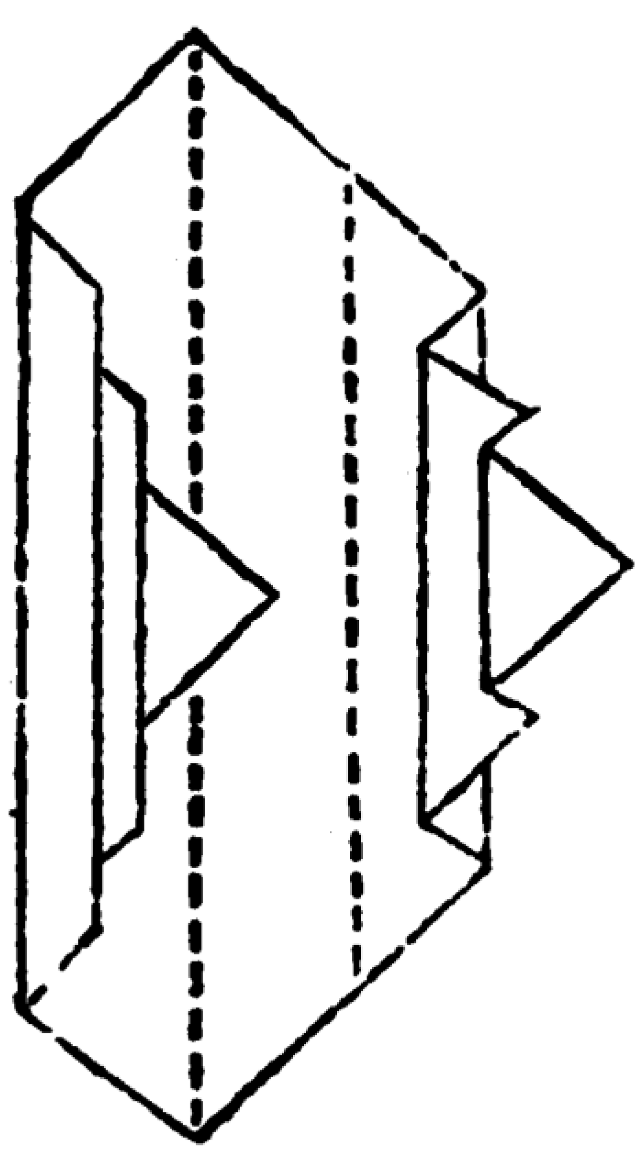


硯石包　下包なし。書附あり。

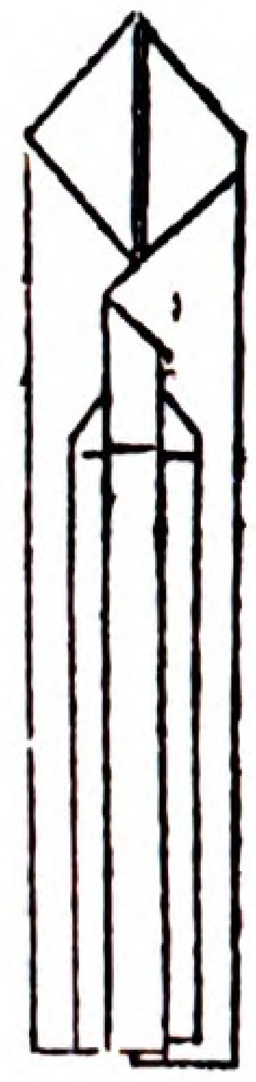


硯の名を書きつくることもあり。水引掛る。

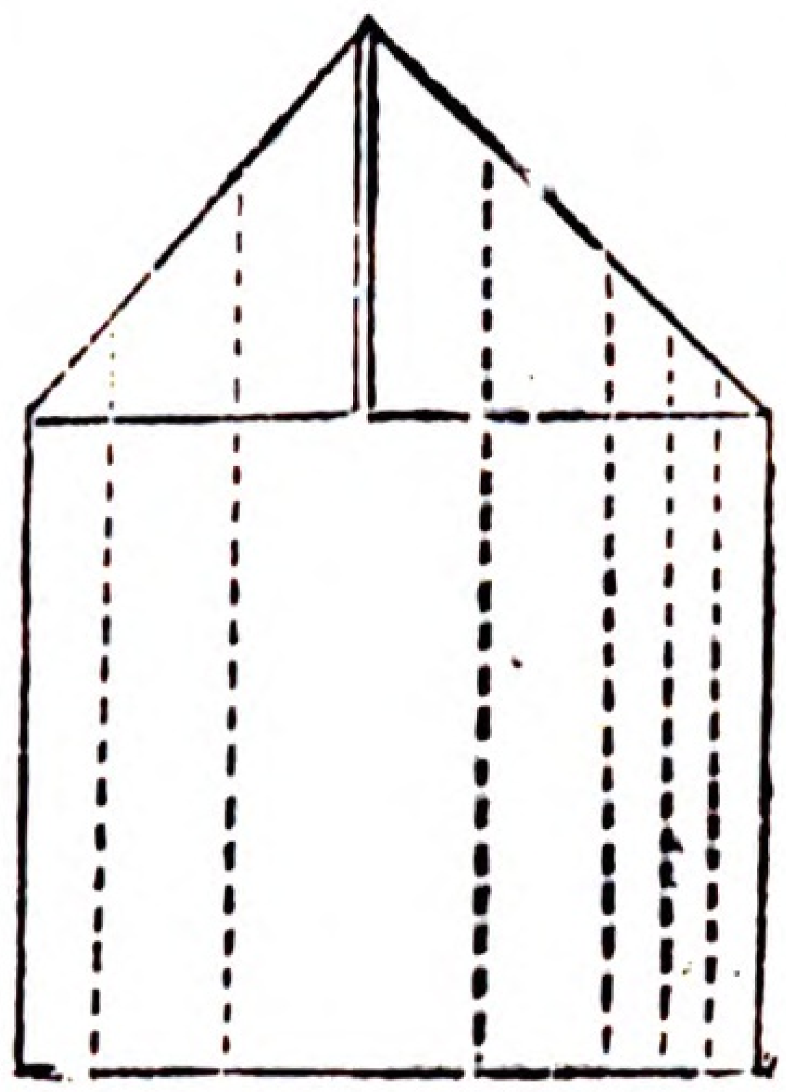
仝解



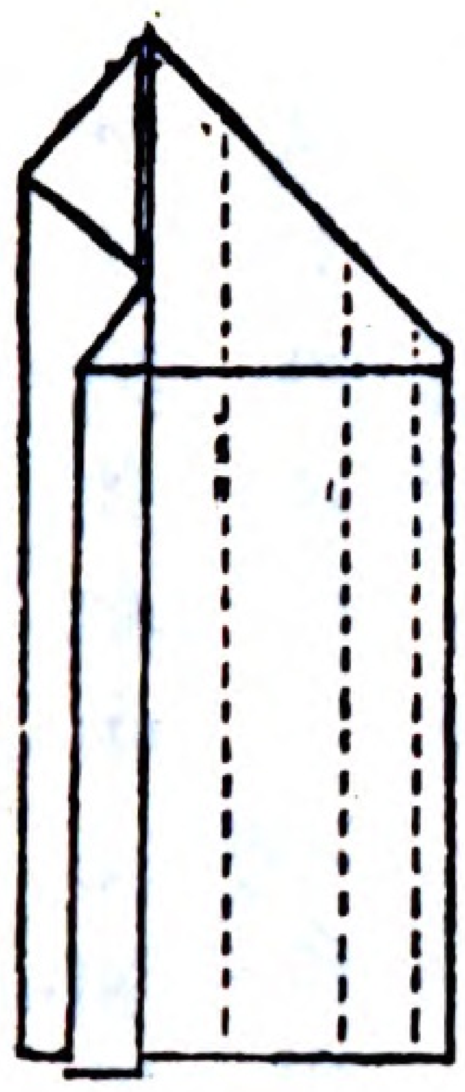
書院筆包　女中むきにては書院かざりに用ゐる也。水引なし。色紙などにても包むことあり。書附なし。



全解の一



全解の二



茶の湯

關　葦雄

緒言

茶は吾國固有の嘉木にして弘仁年中天皇の御供に備へし事歴史にあり。(雖然式上に至ては何物たるを知るによしなし)下りて康正年間に至り、東山義政侯殊に茶を嘉みせられ、召珠光問曰、(姓は村田幼名茂吉南都稱名寺に入て出家し法林庵の主となる)茶事可得而聞也。答曰、源非乎遊、非乎藝、非放樂矣。復問、有何所作爲乎。曰、以茶道行禮、以茶禮飲之、且、大禮設食、小禮則飲。飲者非酒漿之謂也、鼎湛溪澗之甘泉、爐燒池田之香炭、漢器茶甌、高麗盞、結草作廬、示陋巷之樂、聚石築庭、表深山之趣也。重

問、次第如何。曰、古之所謂道、猶路。凡物之所以通行者、皆名之曰道。合于茶曰茶道、次第君子所貴之飲禮爲次第、意風者因睦處士也云々。說公曰、得聞、善哉、茶道之稱、實茶禮之號亦然。說茶道者、莫明於此道、莫正於此禮矣。其室四疊四筵之外加半筵、以爲嗜茶處矣。次て織田信長、豐臣秀吉の二公此道に參究し、千宗易、利休居士に命じて茶道の矜式を改良大成せられたり。爾しより以來、朝となく、野となく、茶を嗜み、交際に、鑑定に、建築に造庭に、料理に、皆此法に由りて大に便益を啓き、諸流隨て起り。門派隨て多し。德川氏に迄て數寄屋方なる者を置れ、列藩諸侯亦茶道の專門家あり、高尙の風彩江湖に普ねかりしが、維新の曉世事の變動に伴れ、此路殆んど地を拂ふに至らんとす。明治八年の頃より、稍や再興の萌ありと雖も、今日尙、委靡して振はず、豈慨歎の至りならずや。之に反して歐米人は、大に此道を賞賛し、看櫻會に茶讌を設け、各自器什を購求し、已に英國の如きは、我國の抹茶器を陳列せる市舖を開けりと聞く、然るに我國之女子にして此道を購究せずんばあるべからず。如何となれば、進退動作器品の運搬、賓客に接するに、尊貴に倍從するに、献立、庖丁、鹽梅に至る迄宜きを得て、程度に至らざるなし。今哉女鑑を見るに至り、此類世間に多しと雖も、如是親切慇懃の女子の女子たる本分を訓導するには此書にしくものあるべからず。啻茶道の欄なきを欠典とや云ん。自後此欄を設立するに至れり。愛觀の諸君は、之を見て此技を練習し、茶道の擴張を企圖し、愈茶道の必要を感じ、眞正の受用を彰はし、國家有志の子弟を養成し、風尙を高等にし、文明の美域

に進で、此道の清規を實踐せん事を庶希す。

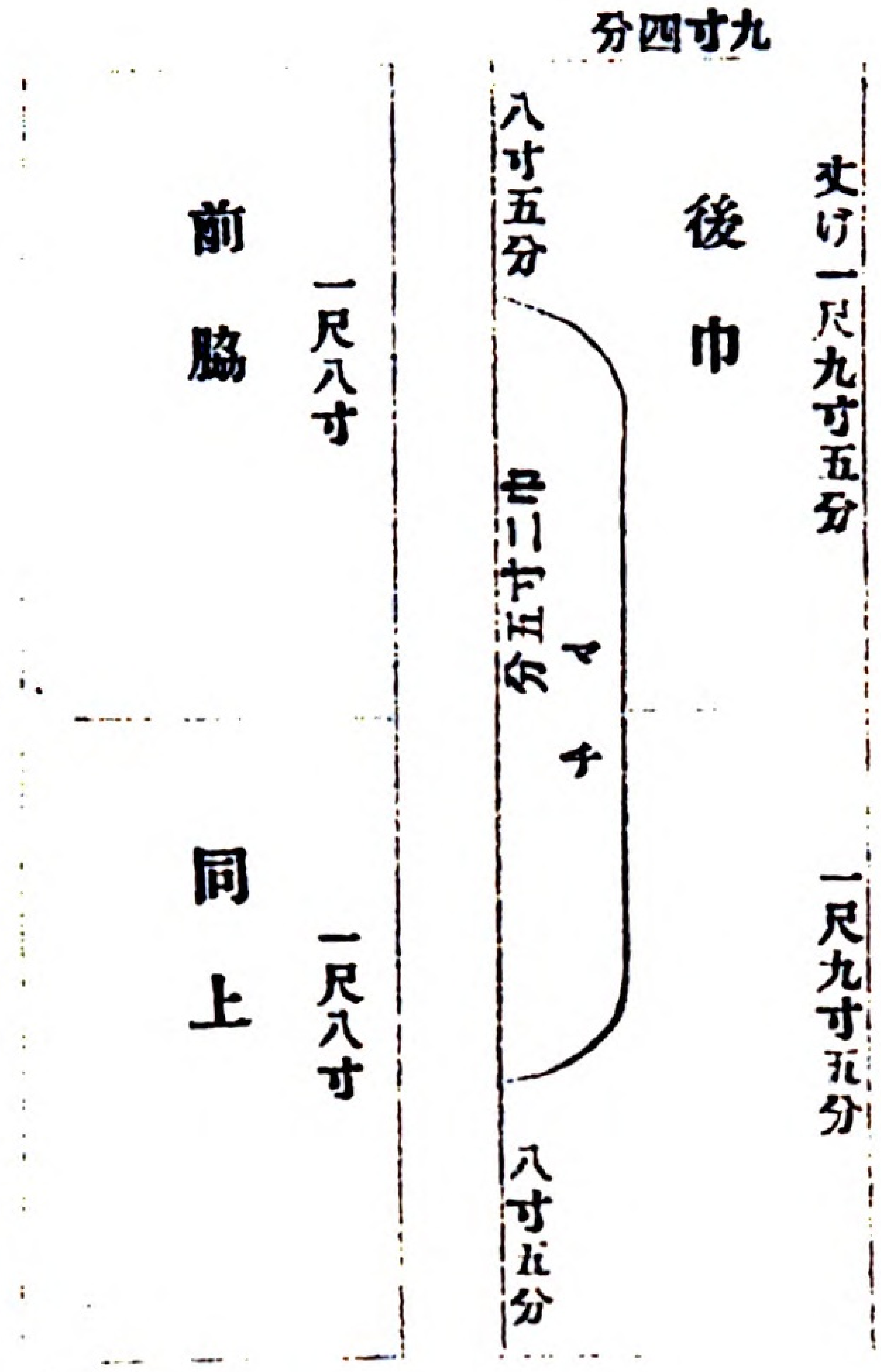
孤峯庵碌仙齋眞茶翁不美

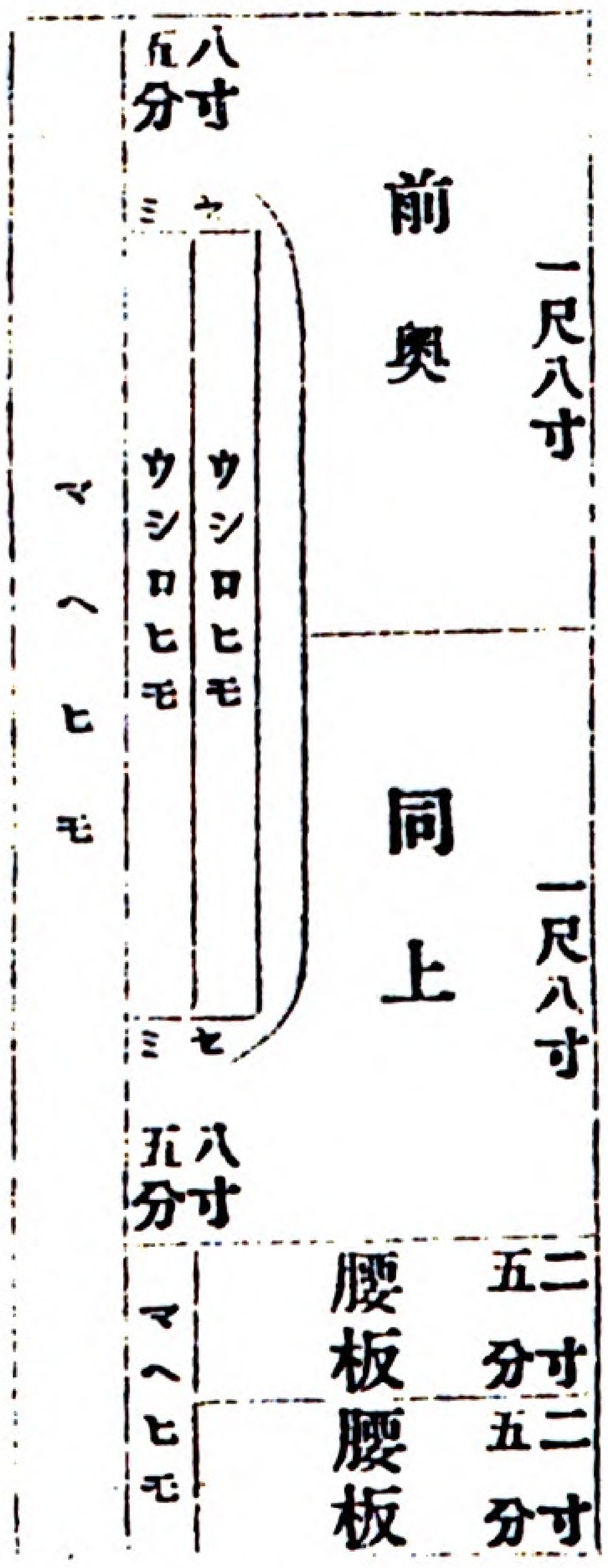
明治三十年六月　東京市芝公園　關　葦雄

たちぬひ

西山たい子

(七十三)小兒襠高袴の裁ち方





總計一丈二尺

圖の如く、まづ後布の丈を二尺とせて、そを二つ合せたるもの四尺だけを切りとり、二つに折り、その合せたる折りめにあらぬ方を五分ばかり斜にかきとり、そのかきとりたる短き方より八寸五分はかりて、折りめの方二寸五分はかりにし、圖の如くよき程にすぢをつけて、かきとり、折りめを切りはなして後布とし、かきとりたるものを襠にすべし。それより前脇の切れをとり、殘りの切れより、縱に眞直に前紐をとり、その取たる殘りの切れより前の奥切れをとりて後布をかきし如くにして、それよりは少し深

く三寸むかりかきとるべし。そのかきたるものより後紐と、せみの切れとをとり。殘りの切れより、前紐のたしと腰板とをとるべし。圖を見合せて裁つべし。

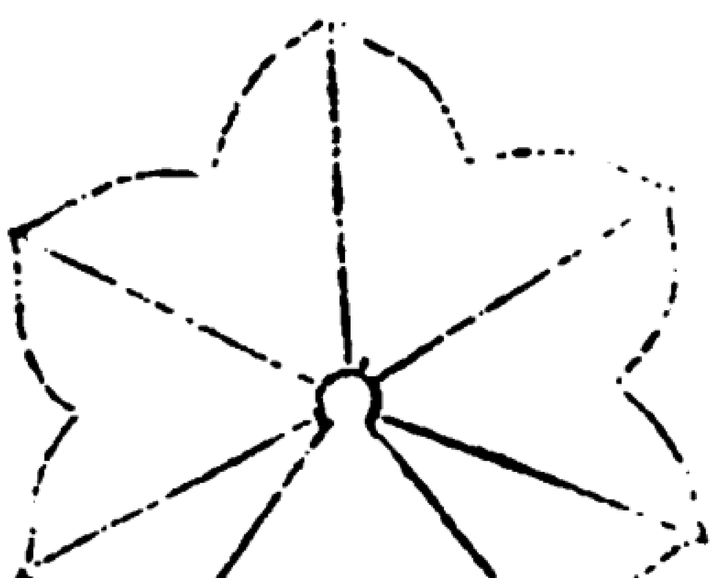
造花

共立女子職業學校敎授
伏見藤三郎

桔梗

滿開花の造り方　花瓣は、絖（糊を引きたるもの）又は寒冷紗を用ゐて、第八十七圖の如き形に斷ち、色染は、「ピオレット」に少しく「マゼンダ」を加へて紫に赤味を帶びたる色となし、之にて花瓣の元薄く、先濃くぼかしにそめ、乾して後「ピオレット」を濃くとき實物を見合して瓣の筋を描き。鏝は、瓣鏝にて花瓣の裏より、餘り力を入れぬ樣、少しく外にそりかへらし、さきに第百三十一號に示したる霧島と同し樣に甲のはしを乙のはしに糊にて着く。萼は霧島と同じ。蘂は雌雄の二種ありて、雌蘂は、撫子の眞と同じ樣に細き針金の先に細長く綿を卷きつけ糊にて固め、之を「グリン」と「オウラミ」とを合せたる極薄き色にそめ、尙先端を「ピオレット」にて少しく黃色を帶むしむ、その圍りに、着べき雄蘂は、寒冷紗を　の如き形に斷ち裏より白紙の卷きたるものをつけて、其上全体に薄糊を引き小糠を着くべし。尙實物を見合して考ふべし。

第八十七圖



半開花の造り方　總て滿開花と同じ樣にして、鏝のみ花瓣の表よりあて丶內部に向かしむるなり。

蕾の造り方　蕾は滿開花よりも花瓣を一まはり少く

断ちて、之を極く薄き「ビオレット」にて先を少しくぼかし、その上を「グリン」「オウラミ」を極薄く溶き合せて、全体を染め、元の處少しく青くなる樣にすべし、鏝は半開と同じあて方にして花瓣の開かざる樣造るにべし。



葉のつくり方　葉は寒冷紗を普通の葉の色に染て、實物に合して形に断ち、裏より針金に青紙をまきたるものを着け、表より實物の通りに筋鏝にて筋を付け、その筋の間々を裏より瓣鏝にて少し膨らみを着け、出來上りて後裏に粉白粉を着くべし。

纏め方は　第八十八圖を參照し、實物に依りて適宜に造るべし。葉は隋圓にして小さき鋸歯あり、互生又は對生なるもあり。

だいどころ

犢の薄片の煎方

犢の最もよき腿肉、又腰肉にても、宜し、其一斤分を、厚さ四分位にきり、よくときたる鶏卵の中に投じ其上に麵包粉を塗し、油煎鍋に、其底に十分ゆきわたるやうに、牛酪、豚の脂肪、又は「オリーヴ」油等を投れ、活火にかけ、其溶けて熱くなるを待、

前の原料を投れ四五分間煎付け、其側の褐色になりたる時、之れを返し、尚三四分間の後、別の鍋にとり、大匙一杯の水、及びソース、食鹽、胡椒とを加へ、レモンの汁少量を和し、一旦沸騰、冷ねざる中に皿に盛て出すべし。

又、此肉を更に甘く調理せんには、鉢の中に鶏卵二個を溶き、之れに、きざみたる大匙一杯の洋芹と、胡椒、食鹽を加へ、よくかきませ、此中に肉を投れてよく塗し、之を麺包粉の中に投じ、鍋の中にて脂肪の熱するを待 前の肉を投れ薄褐色になるまであげたる後、他の鍋にとり、脂肪も他の器にあげたるあとへ、凡そ半斤の鹽藏豚を薄くきりて入れ、暫時活火にて煎り付け、之れを前の薄肉片の脇にとりれき、其あとへ、又三匁五分の米利堅粉を投じ、其褐色になるまでかきまはし、之れに一合の水、大匙一杯のソース、能程の食鹽、胡椒を和して沸騰たせ、前にあげれきたる薄肉片を、他の皿の中央に圓く盛り直し、其周邊に、鹽藏豚と、薄くへぎたる「レモン」一片を列べ、之れに其沸騰したる混和汁を漉しながらかけて用ふべし。

學園



秀歌集（二）

鹽井ふく子

和銅元年 戊申天皇御製

ますらをの鞆の音すなりもの丶ふの
　おほまへつ君たてたつらしも

○天皇は天津御代豐國成姫天皇にて、後に元明天

皇と聞え奉る帝なり○ますらをの鞆にかけたる枕言葉にて鞆はたまきとて、弓を射るとき、弓弦のふれて音を高からしめんために、左の臂につけたるものにて、ますらをのたえずつけをるものなれば、かく云ひしなり○鞆の音すなり「弓をひく音がする」と云ひし意にて、別にたまきの音がすると分けて云ひしにもあらざるなり○ものゝふのは軍人にて、古へは朝廷に仕へまつるものすべて云ひしなれど、此處にはたゞ「いくさびと」の意なり○大まへつぎみ天皇の御前に侍する君にて大臣の事を云ひしなれど、此處には大將の意なり○楯たつらしも楯は矢を拒ぐに用ゆる板なり、たつらしものらしは想像の意にて、即ちだらうなり○もは歎息の意にて、わいとの意なり、即ち楯をたてるらしいわい」との意なれど、之もあながちに楯のみを云ひしにはあらず、弓をひき矢を射、すべて武士が戰ふさまを云ひしなり。

○一首の意は、大夫たちの、弓をうちならす音が高く聞ゆる、また軍の大將が、楯をたてゝ、戰のけいこをするらしいわいとて歎息せられしなり。此時、陸奥越後の蝦夷ども叛き、和銅二年、討手の使をたてらるゝ事あれど、この頃御軍のけいこのありしを、天皇の憂ひ玉ひて、かくよませ玉へるなり。宸慮いとかしこし。女性の御歌なれど、いと勇壯に聞ゆるは、この時代の歌風なり。

御名部の皇女　奉レ和　御歌

吾が大君物なおもほしすめがみの
つぎてたまへるわれなけなくに

○御名部の皇女は、元明天皇の御姉君にて、今の御歌に和し奉りしなり○吾が大君「我が國の天

子様」との意にて、下によの字を加へて「天子さまよ」と見るべし○ものなれもはし、なれもはしのなは莫れにて、なみに云へど、下につけて「思ふなかれ」と云ふべきを、反語にてなれもはしと上にかへせしなり○すめ神の皇統の神を申すなり○嗣ぎて玉へる「つかせ玉へる」なり○われなけなくに「吾なきになくに」と云ふ意にて、吾がゐるからはと云ふ意なり、此歌はまづ三四の句を初句の初めへ廻して見る歌なり。此の如きを隔句の躰と云ふ。

○一首の意は、あはれ、めでたき神さまより、皇統連綿として、よさしつぎ玉へる我が國の天子様よ、物をれぼし玉ふなかれ、御安心遊ぜせ、御代に何ぞかりの事があるべき。たとへ、もし、ゆゝしき大事の侍るとも、私が居ます、私が居りますからは、どのやうな事が起りますとも、私の身をすてゝ、あなたに代り奉りますと、大御心を慰め奉りし歌にて、誠心より出でたる、いとめでたければ、此處に撰び入れ侍るなり。

安部女郎

吾か背子は物なれもひそ事しあれど
　　火にも水にもわれなけなくに

○此歌は、巻の四にありて、順序を違ふるやうなれど、歌がらの同じやうなれど此處にものしどくなり○我が背子は先きにも云ひし夫の事なり○事しあれどのしはつけ言葉にて別に意味あるにあらず「事あらは」との意なり○火にも水にもどんな危い事でもとの意なり。

○一首の意は、我が夫よ、あなたは何もれぼしめすな、何か事があつたらぞ、火の中でも、水の中

でも、どんなあぶなひ事でも、私がれかはり申しますから、安心して居玉へとの意にて、むかし垂仁天皇の皇后、狹穗姫火に入り玉ひ、日本武尊の姫橘姫の水に入り玉ひし事など、思ひよせてよめる意なるべく、その心の操を此處にとり侍るなり、歌がらは如何にや。

大津皇子竊下二伊勢神宮一上來時

大伯皇女御作歌

吾が背子をやまとへやるとさよ更けて

あかときつゆにわれたちぬれし

○之は萬葉集二の卷にあり○大津皇子は天武天皇の御子なり、大伯皇女も同じ御胞の御姉君にて、當時齋院にておはしませしを、皇子、大事をおぼし立ち、伊勢へ御所に行かれしを、歸り上り玉ふ時に、姉君のよませ玉へるなり○我が背子を此處にては「我が弟を」との意なり。すべて、兄弟夫の事を背子と云ふなり○やまとへやるとやまとは皇子の住み玉ふ國、やるとは歸すとてなり○小夜更けて「夜中に早く」と云ふ意なり○あかとき露あかつきの露なり、朝早く東の明るくなる時なれどむかしは明時と云ひしを、後世あかつきとなりしなり○我立ちぬれし「我はいつまでも立ちて見て居てぬれた」との意なり。」○一首の意は、折角我が弟が伊勢へ來て、うれしひと思ひし甲斐なく、またやまとへかへり行く、それを送らんとて、朝早く旅立ち行くを見送りて、さらでもつゆしげきあかつきに、涙さへそひて、我はしばらく見送りて、悲しく思ふたとの意にて、言葉かざらず、情ふかき歌なり。

二人ゆけど行き過ぎがたき秋山を

いかでか君がひとりこゑなん
○之も大伯皇女が、同じ時よみ玉ひし御歌なり○行き過ぎ難き「通り憎くい」との意なり、秋山秋の山なり○いかでか君がの君は弟の事を云ひしなれど、男なれど尊ひしなり○ひとりこゑなんのなんは想像の意にて、こゑるだらうとの意なり。
○一首の意は、二人たづさはりてつれだち行きてさへ、秋の山は物さびしくて、何となく悲しく、通りにくひものを、我が弟よどうして君は越ゑて行くであらふ。さぞかし露霜が身にしみあまる事であらうと、弟のひとり越ゑ行く旅路の空を思ひやりし、いとあはれに情深き歌なり。



雨月物語

上田秋成

青頭巾

むかし快菴禪師といふ大德の聖おはしましけり。總角より教外の旨をあきらめ給ひて、常に身を雲水にまかせたまふ、美濃之國の龍泰寺に一夏を滿しめ、此の秋は奥羽のかたに住とて、旅立給ふ。ゆき〳〵て下野の國に入給ふ富田といふ、里にて日入はてぬれど、大きなる家の賑はしげなるに立よりて、一宿をもとめ給ふに、田畑よりかへる男等、黄昏にこの僧の立

るを見て、大きに怕れたるさまして、山の鬼こそ來りたれ、人みな出よと呼のゝしる。家の內にも騷ぎたち、女童は泣さけび展轉びて猥々に竄る。あるじ山枴をとりて走り出、外の方を見るに、年紀五旬にちかき老僧の、頭に紺染の頭巾を被き、身に墨衣の破たるを着て、裹たる物を背におひたるが、杖をもてさしまねき、檀越なに事にてかくかり備へ給ふや、遍參の僧今夜ばかりの宿をかり奉らんとてこゝに人を待しに、おもひきやかく異しめられんとは、瘦法師の强盜などなすべきにもあらぬを、なあやしみ給ひそといふ。莊主枴を捨て手を拍て笑ひ、彼等が愚なる眼より客僧を驚しまいらせぬ、一宿を供養して罪を贖ひたてまつらんと、禮まひて奥の方に迎へ、こゝろよく食をもすゝめて饗しけり、莊主かたりていふ、さきに下等が御僧を見て鬼來りしとおそれしも、

さるいはれの侍るなり。こゝに希有の物がたりの侍る、妖言ながら人にもつたへ給へかし。此里の上の山に一宇の蘭若の侍る、故は小山氏の菩提院にて、代々大德の住給ふなり、今の阿闍梨は何某殿の猶子にて、ことに篤學修行の聞めでたく、此國の人は香燭をはこびて歸依し奉る、我莊にもしば／＼詣給ふで、いともうらなく仕へしが、去年の春にてありける越の國へ水丁の戒師にむかへられ玉ひて、百日あまりとゞまり給ふが、他の國より十二三歲なる童兒を俱してかへり給ひ、起臥の扶とせらる、かの童兒が容の秀麗なるをふかく愛させたまふて、年來の事どもゝいつとなく怠りがちに見え給ふ。さるに玆年四月の頃、かの童兒かりそめの病に臥けるが、日を經ておもくなやみけるを痛みかなしませ給ふて、國府の典藥のおもたゞしきをまで迎ひ給へども、其しるし

もなく終にむなしくなりぬ、ふところの璧をうばはれ、釵頭の花を嵐にさそはれしおもひ、泣に涙なく、叫ふに聲なく、あまりに歎かせたまふまゝに、火に燒、土に葬る事をもせで、臉に臉をもたせ、手に手をとりくみて日を經給ふが、終に心神みだれ、生てありし日に違はず戯れつゝも、其肉の腐り爛るを吝みて肉を吸骨を嘗て、はた、喫ひつくしぬ。寺中の人々院主こそ鬼になり給ひつれとて、連忙逃さりぬるのちは夜々里に下りて人を驚殺し、或は墓をあばきて腥々しき屍を喫ふありさま、實に鬼といふものは、昔物がたりには聞もしつれど、現にかくなり給ふを見て侍れ。されど、いかゞしてこれを征し得ん、只戸ごとに、暮をかぎりて堅く閉してあれど、近曾は國中へも聞えて、人の往來さへなくなり侍るなり。かゝるゆゑのありてこそ、客僧をも過りつるなりとかたる。快菴この物かたりを聞せ給ふて、世には不可思議の事もあるものかな、凡人とうまれて、佛菩薩の教の廣大なるをもしらず、愚なるまゝ、慳しきまゝに世を終るものは、其愛慾邪念の業障に攬れて、或は故の形をあらはして恚を報、或は鬼となり蟒となりて祟りをなすためし、往より今にいたるまで、算ふるに盡しがたし。又人生ながらにして鬼に化するもあり。楚王の宮人は蛇となり、王含が母は夜叉となり、呉生が妻は蛾となる、又いにしへある僧、卑しき家に旅寢せしに、其夜雨風はげしく、燈さへなきわびしさにいも寢られぬを、夜ふけて羊の鳴聲の聞えけるが、頃刻して僧のねぶりをうかがひてしきりに齅ものあり、僧異しと見て、枕におきたる禪杖をもてつよく撃ければ、大きに叫んでそこにたふる、この音に主の嫗なるもの、燈を照し來るに、見れば、若

き女の打たふれてぞありける。嫗泣々命を乞ふ。いかゞせん、捨てゝ其家を出しが、其のち又たよりにつきて其の里を過しに、田中に人多く集ひてものを見る。僧も立よりて何なるぞと尋ねしに、里人いふ鬼に化したる女を捉へて、今土に瘞むなりとかたりしとなり。されどこれらは、皆女子にて、男たるものゝかゝるためしを聞ず。凡女の性の慳しきには、さる淺ましき鬼にも化するなり。又男子にも、隋の煬帝の臣家に麻叔謀といふもの、小兒の肉を嗜好て潛に民の小兒を偸み、これを蒸て喫ひしもあなれど、是は淺ましき衷心にて、主のかたり給ふとは異なり。さるにてもかの僧の鬼になりつるこそ、過去の因緣にてぞあらめ、そも平生の行徳のかしこかりしは、佛につかふる事に眞誠を盡せしなれど、其兒童をやしなはざらましかば、あはれよき法師なるべきものを、一たび愛慾の迷路に入て、無明の業火の熾なるより鬼と化したるも、ひとへに直くたくましき性のなす所なるぞかし。心放せば妖魔となり、收むる則は佛果を得るとは、此法師がためしなりける、老訥もしこの鬼を教化して本源の心にかへらしめなば、こよひの饗の報いともなりなんかしと、たふときこゝろざしを發し給ふ。莊主頭を盥に搯て、御僧この事をなし給はゞ、此國の人は淨土にうまれ出たるがごとしと、淚を流してよろこびけり。山里のやどり貝鐘も聞えず、廿日あまりの月も出で、古戸の間に洩たるに、夜の深きをもしりて、いざ休ませ給へとておのれも臥戸に入りぬ。

——————

年中風雨考節録

井上頼文寄贈

天保十二年辛丑歳晴雨考（續）

○九月小　今月雷あれど米大に高し、又今月朔日より九日迄のうち北風ふけど穀多し。

○朔日大雨、今日より十二日迄八専、今日晴天なれど凶、小雨なれど豊なり、今明日中風雨の變多し。二日密雲多し。三日雨。四日陰風、今日卯に當る風雨ありといへり、今日風あれど旱なりといへり。五日前にれなじ、土用丑五刻に入る。六日暖雨、今日雨ふれど四十五日日を見ず。七日晴風。八日大雨霜降九月中寅一刻に入。九日冷雨今日晴天なれど冬至元旦上元清明の四日皆晴天なり、又今明日の中風あれどつよし。十日密雲多し。十一日雨天。十二日陰風八専のをはり。十三日雨、今日晴天なれど冬中晴天多し。十四日風あり、今日丑に當る雨ありといへり。十五日陰風、今日菊花ざかり。十六日密雲多し。十七日晴風。十八日陰風。十九日密雲、多し今明日中風雨の變多し。廿日雨天。廿一日前に同じ今明日の中風あれどつよし。廿二日風。廿三日陰雨立冬十月節辰七刻に入、今日より液雨の氣盛りなり今明日中風雨の變多し。廿四日曇風、今日紅葉盛なり。廿五日晴天にして雲多し。廿六日風あり。廿七日曇天今日風の愼あり。廿八日晴天今日卯に當る風雨ありといへり、今日風ふけど日和よし。廿九日前におなじ。

十月大　今月壬子の日なし、十月無壬子留寒待後春とあり、來年迄餘寒多しとなり。又冬三月の中地震あらど來年大に豊なり。

○朔日晴天にして雲多し、晴天なれど冬晴多し、風

雨なれど來年夏旱多し。二日風あり。三日陰雨。四日雲多し、又今日を入液とす今日より末に降る雨を眞の液雨とするなり、百虫これを飲みて皆蟄伏し、來春雷初て鳴を聞て即ち出づ、又今明日の中風あらどつよし。五日風あり。六日曇暖。七日晴天八日陰雨。九日曇天、小雪十月中末三刻に入る、又今日を出液とす、今日より末に降る雨は液雨にあらず、又今日雨ふれど米安し。十日風あり、今日雨ふれど米高し。十一日陰雨。十二日雲多し。十三日風あり、今日雨ふれど米高し。十四日曇風、今日雨ふれど長し、今明日中風雨の變多し。十五日晴天、今日を五風生日といふ、風あれど終年風雨期の如を主どる、これを五風信といふ。十六日前におなじ、今日晴天なれど冬暖を主どる、雨あれど寒を主どる、今明日の中風あれどつよし。十七日風あり。十八日雲多し。十九日曇天。廿日陰雨、今日風の恐れあり廿一日晴天にして雲多し。廿二日曇天にして折々小雨、今明日の内雨ふれど來春米穀高し。廿三日風あり。廿四日暖雨、大雪十一月節戌初刻、今日辰に當る風雨ありといへり、今明日中風雨の變多し。廿五日暖風。廿六日前に同じ。廿七日暖雨。廿八日曇天、今明日の中風あれど強し。廿九日晴冷。三十日冷雨。

○十一月大　今月雷鳴れど來年米高し、今月雪少けれど來年旱。

○朔日冷風、今日風雨あれど麥によろし。二日晴冷今日より十二日迄八せん、今日壬に當る旱を主どるとあり。三日冷雨。四日風あり、今明日中風雨の變多し。五日暖なり。六日前におなじ。七日晴冷今日雨ふれど四十五日日を見ず。八日冷風。九日晴雨

十日晴冷冬至十一月中子五刻に入、今日晴天なれど年内雨多く萬物不ㇾ成風寒けれど吉なり、又今明日の中風あれどつよし。十一日冷雨。十二日小雨、今日壬に當る冬至後二日めに壬あれど旱すくなしといふ。十三日暖なり、八専のをはり。十四日冷風、今日子に當る雨ありといへり、今日雨ふれど雪飛ぶ事千里とあり、雪多しといふ事なり、今明日の中風雨の變多し。十五日晴冷。十六日暖なり。十七日冷雨。十八日冷風。十九日暖なり。廿日冷雨。廿一日冷なり。廿二日前にれなじ、今明日の中風あれどつよし。廿三日晴冷。廿四日暖なり、今明日の中風雨の變多し。廿五日密雲多し、小寒十二月節卯二刻。廿六日暖雨。廿七日晴風。廿八日密雲多し。廿九日雪、今日風の恐れあり。三十日まへに同じ。

○十二月小

○朔日雪、今日風雨あれど來春旱し、來夏水出で米高し。二日晴風。三日陰風。四日霰、今明日の中風あれどつよし。五日晴風。六日密雲多し。七日雪あり。土用巳三刻土用中寒强けれど來年旱也。八日陰風、臘日なり、今日迄三度雪降るを臘前の三白とて來年豐なりとす。九日密雲多し。十日晴風、大寒十二月中巳七刻に入る、今日雨ふれど米高し。又今明日の中風雨の變多し。十一日陰風。十二日雪あり。十三日晴風、今日雨ふれど米高し。十四日密雲多し、今日雨ふれど長し。十五日晴風、月そく八分の丑の初刻上と左の間よりかけ初め丑の六刻上と右の間に甚しく寅の四刻右の方にをはる、凡今月に日月蝕あれど來年水災ありといふ。十六日前に同じ今明日の中風あれどつよし。十七日雪あり。十八日陰雲。十九日密雲多し。廿日陰風、今明日の中風雨の變多

し。廿一日冷雨或霰。二十二日密雲多し、今明日の中雨ふれど來春米穀高し。廿三日晴風。廿四日前にれなじ、今日辰に當る風雨といへり、今日海上を愼むべし。廿五日晴天、立春正月節申四刻。廿六日前に同じ、今明日中風雨の變多し。廿七日陰雨。廿八日まへに同じ、今明日の中風あれどつよし。廿九日密雲多し。

●附錄八節風候

○立春の日清明にて雲少きは歳熟す。陰れど蟲有て禾豆を傷る。雨降りて旱多し。嚴霜有て人病多し。雪有て年豐にして麥熟し人民安し。乾風來れど暴霜物を殺らす。北風にて大寒多し。艮風來れど雨調ひ五穀熟す。東風にては暴雷多く人安し。果實は不レ成。巽風來れど風多く蟲あり。晴又は旱なり。南風にては旱魃して萬物を傷る。坤風來れど春寒人病あり。六月大水あり。西風にて霜降て旱なり。民に疾疫あり。

○春分の日晴明なれど燠熱にして萬物不レ成。風乾より來て寒多し。北風は米貴く豆菽不レ成民疾あり。東風は大豐にして人安し。巽來れど蟲有て四月暴に寒雨あり。南風は五月初は水、後は旱なり。坤來れど水多く人に逆病あり。西風は逆氣春寒ければ麥貴し。前後とも雷鳴有て吉なり。年豐なり。

○立夏の日雨ふりて吉。夜雨は麥、及蠶を損ずること多し。清明風ありて年熟す。乾風は逆氣の病あり。夏霜ありて麥凶なり。北風は雨多く人疫す。艮風は崩レ山動レ地。人疫、穀を損す。東風は不時の雷糴貴く。南風は夏の旱米賤く人病す。坤風は人安からす萬物を傷る。西風は蝗。

●夏至の日乾風は寒して萬物を傷る。北風は寒暑不

レ時山水暴に出つ。艮風は山崩米貴し。東風は五穀熟す。巽風は九月の風傷ニ百果一。南風は熟す。坤風は六月雨にて洪水急レ風慢レ風なり。西風は秋雨多し。霜降て寒ず。

○立秋の日涼風あつて吉なり。熱すれど則來歳の災旱魃疫あり。秋天に雲起て風なけれど雨なし。乾風は寒なり。雨多し。北風は冬雪雨多し。艮風は穀不レ熟。東風は暴雨多し。草木再榮ゆ。巽風は凶なり。南風は旱多し。坤風は五穀熟す。西風は秋雨多し。霜重る。

○秋分の日乾風は盗起る。來年陰雨多し。北風は寒多し。艮風は急風なり。十二月の陰寒なり。東風は人疫す。巽風は十月暴氣多し。南風は旱災あり。歳悪し。坤風は土工興る。西風は五穀熟す。

○立冬の日乾風は天下安く年豊なり。巽風は冬温なり。明年の夏旱なり。南風は五月大疫なり。

○冬至の日風寒けれど吉なり。

（をはり）

こは、おのれ金澤に住めりし頃、千秋某なるものゝもちしを、明治十七年のころにうつしおきたるなり。いかゞはしき節なきにもあらねども、奴婢、しもべのやからにも教へきかし給はゞ、國のてぶりのあらましをも心得て、あながちあだごとにもあらじと思へるまゝに寫し出して、讀者諸嬢に示しまつるになん。

増補臼挽歌

金津常十郎

序

深草苅る科野の國、吉蘇の綠野の園原氏の某ありて、御國の道を仰ぎ、尊び、まなびのまどに、年月

を重ね、其の道のしるべせしは、よろこび限もあらじかし、猶も教の懇切なるを、麻衣のまくり手をしにも、蘆火焼く伏家までも知らしめんと、臼挽歌てふを、著して世に弘め置けり。これや、わが御國の道を如斯安らかに、いと、へるくしも、心を用ゐしこそ、玉幸ふ神の御心にも叶はめ。今や、いさゝかたらざる言の葉を補ひて、葎の雫も流れて吉野川の深き淵とも成れかしと、玉田永教書付けぬ。

文化元甲子歳

うたを唱へや眞實をうたへ歌は心のはなじやもの。
神の御國のこの日の本にうまれ出でたる嬉しさよ。
かみのみすゑの其の種ついで人と生れし嬉しさよ。
人といふもの尊ひものよひとになるのが神のみち。
あまのいはとのあな面白のすゞのみねとの貴さよ。
五十鈴眞鈴や驛路の鈴にわくま障碍はちかよらず。
はらひよめとは春日のかみの厚きめぐみの御教ぞ。
悪事災難つみごととがをはらひよみてぞ拂ひさる。
おもはざりきの過りごとも積り積れどとがとなる。
庭の木の葉も心のちりもはらへ掃へとまたつもる。
あまつみのりも直毘の影で罪の消ゆるは人知らぬ。
今日の天照日の御神をまつりいのれよあめのした。
ものの出來るは日のかみよりぞ御月祭りは十五日。
二十八にち御星のまつりはらひきよめて身を齋へ。
二十三夜と八日の月を待つはをみなの身のいのり。
かみのさだめの一六日は壽命ふくよくうくる日ぞ。
夏至や冬至や彼岸の節にこゝろきよめて日を拜め。
猿田彦待には七いろ菓子のほかにそなへよ白餅を。
かのえさるの夜鷄迄遊べ盤上いとたけさまざまに。
きのえねの日は大巳貴命祭御饌しそなへよ玄米を。
巳己の日は倉稲神まつりさゝげそなへよ赤めしぞ。

甲子巳待をよくつとむれだれもふ願はかなふとよ。
たびへゆく人道祖のかみを祭りいのりて門出せよ。
神の長田のいなほのすゑと朝飯夕飯をいたゞけよ。
衣裳きるのは齋機殿のかみの　御衣のかげと知れ。
ころもにおるいろ染めなすは天の羽槌のかむ敎へ。
鏡とりもち化粧をするはあめの糠戸のかみのかげ。
さかきをりとり簪さすはあめの鈿女のかむをしへ。
たけをけづりて笄さすはかみの臍の緒たつはじめ。
かみをすき初ふみかくことは天の日鷲の神をしへ。
刀脇差及ものゝはしめあめの目一箇のかむをしへ。
苧うみ機織りもの裁縫ふてあつさこらへぬ神敎へ。
鹽土翁の養たまひし鹽の始まり船桴橋の通も神敎。
やまに生立うみより出るも神のめぐみの種と知れ。
異國島々もろこしよりものゝ來たるはかみの德。
かみの御恩と。父母の恩譬へがたしや海山までも。

神は正直まことをてらす正實なければやみの夜ぞ。
人は正直　天事がはしら信がなければ身はたゝぬ。
我がこゝろは天照神の御賜ものぞとつねに知れ。
われが心にいつはりあらば伊勢の御鏡かきくもる。
神のかゞみはよくおもへやみも月夜もみるかゞみ。
おやを内宮外宮とあふげかぎりあらじや孝のみち。
親につかへて孝行なれば富もたからもふり來たる。
おやのおほせに背けるものは果は罪科身にむくふ。
主のおかげでこの身が立つと知ば勤も苦にならぬ。
たとひ物事發明なりと二心あるひと身はたゝぬ。
よいもわるいも噂は嘘よ見ると聞とはちがふもの。
忠と孝とをわすれたものは狗のなかでも野良狗よ。
いぬは夜を守る鶏は時告る道知らぬ身の哀れさよ。

橘舎漫録

橘の家主人

こは、群書類從の編者をもて名に高き塙保己一を助けて、かの不具の撿校をたすけて、其事業を大成せしめしばかりの、博覧洽聞なる石原正明のものせし、年々隨筆の中より拔萃せしものなり、其說のたてざまいとたしかに、其筆の運びやういとおもしろく、通じてものせまほしくれもはるれど、そもあまりの事なれど、こゝには其一つ二つをかいあるしてむ、されどこはたゞ女子に近よれる說をのみ撰り出たるものなれど、有るが中にすぐれたる說すぐれたる筆とにもあらず　見む人その心してよ。

眉剃と齒黑め

女の眉そる事は、黛もて書むとての事なり、さるは、はえ際のあどけなき所、色のこきうすき所などありて、わろびたれど、それをそり落して、おもふまゝに書くなり。今大かたは剃りたるまゝにて、かゝむとも思ひたらぬは、無沙汰なる事なり。又齒黑めは色のきはみて、きたなげなるをかくさむ料なり。共に女しく物心づきたる趣なり。俗にこれを元服といふは、あたらぬことながら、おとなになりたる意はかよへり。

主人いはく、當今眉をたつるを、西洋の風なりとおもひて心はこりかなる人、はたいやしめゐる人たち、よくよく味ふべし。

又いはく、女子の容姿に心用ゐるべきは、今更いふまでもなし。眉そり、齒ぐろめ、みな優に、女子の品位を高むるに足る、女子たらむもの、豈心せでやは。これら少さきことより、禮式などいふ

ことぐ／＼しきあたりにまで、及ばざるゝをや。

踐祚帝の御諡

同帝の再度御位につき給ひしは、稱德齋明、みな女帝にわはします、さて初めの度は崩御まし／＼たるにあらねど、御諡あるべきやうもなきを、皇極孝謙と奉りたるは、（孝謙稱德は、天平寶字二年に寶字稱德孝謙皇帝と上りし現御世の尊號を、二つにして、用ゐたり、されど二つにしては二ところときこゑていかゞ也）いかなる事ならむ、恒武天皇の御時に、上世の御諡は奉りしといふ說あり、その時仰事うけたまはりし博士、御代のかはるごとに、かたはしよりつけまゐらせて、玉體の一柱なるもいはず、疎漏なりし事にこそ。

地名の華夷

東海談に、地名の正しく雅なるは、中華はいふにや及ぶ、次は朝鮮と安南とのみ、此二國はよく中華を學びたるなり、豈唯これのみならむや、名字稱號の正しきは、二國に及やある、此二國を除く外は、すべて夷言なりといへるは、頑なる論なり。皇國とても、江戶をさして江戶といひ、大坂をさして大坂といひ、親をおや、君をきみといはむに、何の正しからざることかあらむ、西土の稱呼を準として、それに似たるを正しとしそれにたがふは拙し。西土も一域、皇國も一域、こと國々も一域なれど、其國々の稱呼こそ正しけれ、からに似ずともなでふ事かあらむ、朝鮮南安のから國に似たるは、久しくかの國に屬きて何事もその倣をうくる故なり、されどかの二國に似たるは耻にて、似ぬ國々こそ、かへりてたけきものにはあれ。主人いはく東海談は、平維章の著はしゝ書の名なり。世の大和魂もたらぬ漢學者は、上に天壤无

窮の　皇統を戴き、下に神代ながらの臣民を有する、宇内無比の國土に棲息しながら、自ら東海の夷と呼はり、甚しきは我が　皇祖を誣ひて、呉の太伯の後なりなどいふものあり、みな彼國の書籍にのまれしもの丶言なり、東海談の作者、またこの類たるを免れず、

（つ丶く）

暴風のたまもの（續）

三好越南

滊船は明曉愈々出帆すべしと船員より報じ越せしを以て、一同は諸拂をなし丶が、物價、宿泊料等の如きは、内地に比して甚だ高價なるに驚けり、計算を終へて晩餐を喫し、浴後直ちに寢に就けり。

五時近き頃、滊船は頻りに滊笛を鳴らして乘客を促がせり、予等一同は直ちに起き出で、朝餉を了へ、行李を理めて波止場に至れば、本船二艘の周圍、客を載せたる艀舟を以て相來往し、頗る雜沓し居れり予は之を舟子に問ひしに、這は瀬波上陸の乘客、及貨物を乘せ替ふる爲なりといふ。乃ち一同は直ちに一號に搭じたり。兎角する内に、三號は用意全く整ひたりと見ゑ、數聲の滊笛と共に、黑蛇の如き烟を殘して加茂へ向けて拔錨せり。予等が搭せし一號は石炭の搭載にて四十分を後れて出帆せしが、瀬波へ上陸せしは八時過なりし、此の間の海上四海里。

予が粟生島に遊ばんとせしは、既に久しかりしが、毎に種々の障りにて意を得ず、今回暴風のために偶然同島に寄船し、同島大半の狀態を知りはし予が大に滿足する處にして、偏に暴風のたまものなりかし。

馬

此の島の馬は、内地のものに比すれば稍小にして頸

短し、性質は概して悍逸なるが如し、是、蓋野馬の常性ならん、明治十四五年の頃數頭を内地に渡せしことありしも、多くは航海中に斃れ、僅に殘るものも幾ばくならずして死せりといふ。

島人の語る處に依れば、此の馬群中には一種の義理だての如きものありといふ。そは、島中立島山の北に夥しく笹の茂生せるあり、是ぞ馬が冬期の食料として最も大切に畜へ置くものにして、冬期に至らざれば如何なる塲合にても喰ふことなし。若し、馬群中偶〻喰ふものあれば、忽ち之を嚙み殺す、如斯ことこれまで三四回ありしといふ。又毎年季節に至れば、島人等は此の馬を山より牽き來りて耕作に役し、耕作終れば復た山に放つを例とせり。今その捕捉法を聞くに、毎年五月初旬島中の男子にして、十七歳以上のものは擧つて捕捉に出づるの約にして各手に大なる棍棒を携へ、部署を定め伍を組みて山に至り、四方より追ひ回りて十分に疲勞せし頃を計り、亂聲疾呼して立島山の頂に逐ひ上げ、直ちに繩をかけて縱橫に縛り上げ尙棍棒にて亂打し、氣息奄々たるにいたりて之に轡を銜め縛を解きて各家に牽き歸るといふ。

笑話

ふさ

藥罐と冬瓜

我が里に面白き翁あり　名を善左衛門といへり。常に洒落なる事をのみして人の顋をはづさせけり。或る時、日暮になりて旅より歸らんとしけるに、山路にかゝりて、只一人なるに、もの淋しきこといはんかたなし。道づれもかなと思ほとに折りよくも先た

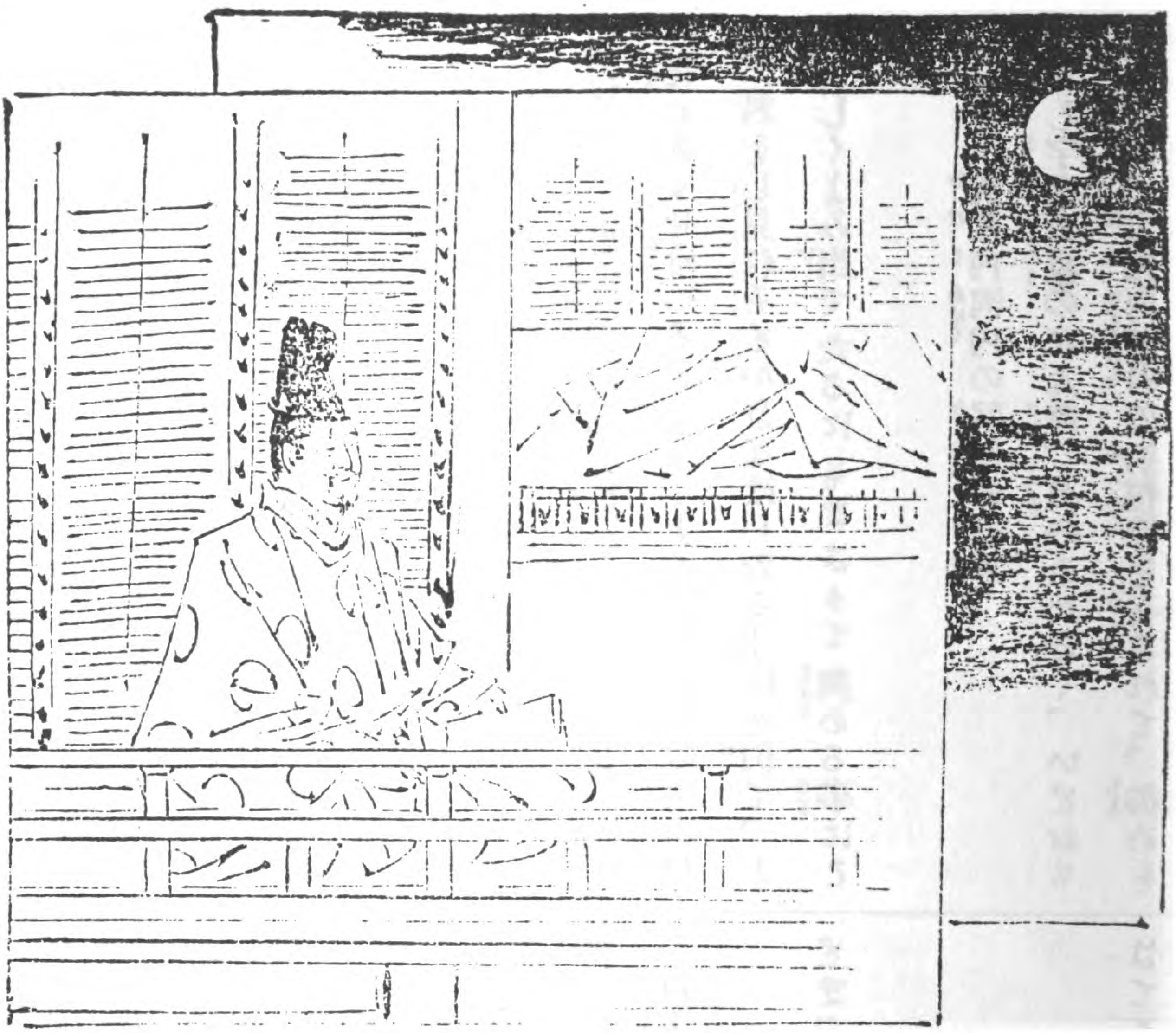
ちて古鐵買の行くかあり。れいつきて、こはよき友を得たりとて打喜びて、共に種々のものかたりなどしつゝ行きけり。古鐵買、家に歸るなりとて別れんとするに、善右衛門の翁いふやう、我が家にも古鐵の賣るへきか數多あり、君のものを見れは藥罐をも持ち給へるか、我には、これより今二まはりまさりて大きなるかあるなり、それをも賣らんに、此處よりは遠くもあらねどとて、しひて道づれに伴れ歸りけり。さて、翁、家に歸りて、道伴の禮などいひてひたすらにもてなす。古金買のいふは、はや時もうつりぬれどかの古金をこそみせ給へといふに、翁何出さんともせで、茶などくみ來りてもてなす。古金買いらちて、此のやくわんより二回り大きなりといひ給ひしもの早く見せ給へといふに。翁打ちゑみつゝ奥に行きて、やがて持ちいでたるは、大なる冬瓜にぞありける、古金買此を見て、こはとうがんにあらずやといふに、翁、されどよ、此ぞやかんより二まはり大きとうがんにこそ八くわんより十がんは二まはり大きからずやとて大こゑに打笑ひけれど、古金買も意の外にあきれかへりてふきいだして笑ひけりとなん。さて夜も更けたれどとて、その夜は古金買を懇ろに宿して翌朝歸せりきといふ。

才くらべ（二）

蓬生屋女史

伊勢大輔の慧才

伊勢祭主大中臣輔親の女伊勢の大輔は、和歌をよくし、上東門院につかへて、紫、和泉、小式部と名を齊しうしてめでたき女房なりけるが、その官にまだ仕へ初めの頃、誰にかありけん、宮に櫻花を獻じ奉



るものゝありけるに、折りふし宮の父君、御堂關白道長公の御側に侍しけるが、筆硯をとり、大輔に授けて、何にてもよみて此花にそへ奉れとあるに大輔とりあへず

いにしへの奈良のみやこの八重櫻
けふ九重に匂ひぬるかな

と、時も移さずに、八重九重のあやをさへそへたる、花も幾しほ色まさりけんと思ふもいとめでたし。道長公もいたく感賞せられけるとかや。

また後世その下の句をすてゝ、

いにしへの奈良のみや、この八重櫻

と、上の句の句のきりやうのみをかへて、發句となし、いみじう庭の櫻をほめたる人ありけるが、これ、むかし、一條天皇が、皇后定

子の宮に亘らせ給ひ、にはかに御墨すらし、白き色紙たゝみて、これに只今、とく〳〵たゞ思ひめぐらさで、浪速津にても、何にても、れぼえ居らん事を、春のうた、花の心、何にてもと女房等にせめ給ひしとき、かの清少納言

としふれどよはひは老ぬしかはあれど
花をし見れば物思ひもなし

と、むかし、忠仁公が染殿の后の御前の花がめに、櫻の花をさゝせ給へるを見て、よみ給ひし歌の四の句を、君をし見ればとかきなはしたる才にも似て、あたらしくよみ出でたるにもまさりて興ある事にこそ。

大凡内河内の躬恒の機才

むかし宇多天皇のれん時、月のあかるく、いとおもしろき夜、大凡内河内の躬恒等を召されて、御あそびせさせ給ひ、躬恒に向はれ、そちは和歌の道にすぐれぬるが、月の事を弓張と云ふは何の心ぞ、そのよしを歌にしてつかふまつれと仰せ給ひければ、躬恒、みはしのもとに、立ちどころに

てる月をゆみはりとしも云ふ事は
山の端さしていればなりけり

とすぐよみけるに、天皇感ぜさせ給ひて、ろくにればうちぎをかづけ給ひしに、躬恒かづきながら、

白雲のこのかたにしもれりゐるは
あまつ風こそふきてきつらし

とまた重ねてよみけるとかや。

朴平　（二十四）

白魚女史

さても、朴平は何處へか行かむとすらん。家を出で





〻車を急がせて向ふ方は新橋の停車場、發車には少しく隙ありと聞きて、懐より先きの手紙取り出し、讀むはそも何處よりおこしゝにか。

ちよんまげの頭の雪のとけぬを見るも苦しけれど、春さへに、あゝ、をろちの住みまとふ庵、夏にしならむ如何にかなるらむ。あまりにおそろしけれど、此處へ逃れ住みぬ。戀しくば訪らひ來ませ、箱根山の麓杉たてぬ宿。

としるしあるは、正しう文雄よりのふみ、繰り返し見て、朴平は人目につゝむ涙おし拭ひて、封書の消印など見あらたむるほどに、切符を賣り出したれど、國府津までのを買ひ、おくれぬほどにとうち乗りたる窓の内には、都の人、鄙の人、行く人、歸る人、赤髭長き人さへ交りて、がや〳〵と賑はしう都をはてる人もあれど、田舎を語る人もあり、あるは窓より眺めて、富士が見ゆるなど晴れがましく聲たつる人人の中に、朴平はひとり隅の方に、思案に沈みてくるしげに、貴翁は何處へかなど、おなじ年頃のよき話相手と側の翁のはなしかけむとするにも、只箱根にと口重く答ふるのみ。さては、御湯治にやなど、人のこゝろも知らず、なほとひかくるに、朴平うるさく、用事のありてなりと、舌うちならさぬばかりのにがき答へに、人も興なげに、ふと面をうち守りて、其まゝ口をつぐみぬるもをかし。さて、横濱も通り、大船も過ぎ、藤澤、平澤、大磯。遂に國府津と呼ばるゝに、朴平はうれしきか、苦しきか、沈みたる身を起して、滊車を飛び下り、停車場を出で、それより、又小田原ゆきの鐵道馬車の中に、思案に沈むは、正しく文雄を尋ねむとのこゝろと哀れなり。さても、文雄、箱根は何處の宿にや、表書にはたゞ

相州、中には箱根の籠杉たてぬ門とのみにて、何處とも分かず。箱根中たづねありかむものとはおもへど、都出のおそかりしかど、湯本に着きしころは、はや夕べも過ぎぬるに、今宵は先づ何處にても宿を借り、夜明くるを待ちて、箱根の山中尋ねまはらむとおもひ定め、おちつかぬこゝろを強ひて靜めて、とある温泉宿にやどをとりしかど、それの事かれの事、百代は何としつる、明日は如何にして何處をなどおもへど、こゝろには今よりも主を尋ねまどひて、中々に眠むれず、枕をそばだてゝ、暫らく孤燈をうち守るほどに、夜はます〱更けたり。「遺愛寺の鐘もひびかぬ枕かな」とむかしの人のこゝろさへ忍びあはせて、いよ〱果てしなきおもひに、目はいよ〱さゆるに、かくては明日の足の重からむとおもひて、強ひて眠むらんとおもへど、思ふまゝに、さへかへりぬる枕に近く、鳥の聲のきこえけるは如何にうれしかりけん。朴平飛び起き見たれど、夜は明けたれど、宿のものゝ起きぬに、もどかしく、いくたびも手うちならして、漸く朝げをすまし、宿をば立ちで、宿屋といふやど屋は、軒毎に入りて帳簿を借り見しかど、文雄の姓名はあらぬに、朴平はいよ〱困じて、また手紙取り出し、消印などくり返し見て、たしかに箱根なるに、さても何處にか。箱根の權現、あはれ若殿の隱れ家をなし給へ、今は神より外にたのみもつきて、よわりはてゝ、木の根にうちかくる腰を、また我と勵まし立てゝ、何の精神一到、岩をも通して見せてん。神も、權現もたのむものかはとて、其處此處のいで湯、人の軒、目に入る限り尋ぬれど、問へど、たづぬる人はなほわかず。朴平いまは拔けむとする腰を叩きて、何のかどかり

の事に、命を絶ゑむ。骨となりても尋ねまゐらせむ。若殿、いざ谷の底なり、岩のはざまになりともれはしませ。深さほど中々に尋ぬる甲斐こそあれとて、またもや一心に尋ねて、堂が島の出で湯わたりくゞり出る折ふし、あな朴平殿にはあらずやと、れどろき問ひかくる花の少女。とひかけながら、あきれしさまに、云ひもつゞけず、朴平の顔をど守り立ちたる姿、聲、覺ゆる花の少女。彼の小千代なりけり。

朴平もれどろきて立ちすくみたるまゝ、答へもなし。やがて、少女は何故にかほろ〳〵とこぼるゝ涙を、白妙の袖に包み、近うすゝみより、朴平殿、嘸かしたづねまどひ給ひしならむ。かくとおもはぬには無く、殿にも呉々きこゑて歸りてむとうながし參るらしたるものを、さてもいたくのつやれかた、如何はせん、妾が罪。朴平殿、ゆるして給はれ、何とせしやつれ方ぞ、仆れて給はるなと、泣まどふもあはれなり。

朴平、いつもならで、小猫ども、きたなきものに聲かけられしよ、穢がらはしとれもはむを、今日のみは嬉しく、悲しく、おどゝなる涙を掻き拂ひて、さても小千代とやら諸共にか、殿には何處にれはするや、最早うるさきことは聞ゑじ、案内をして給はれと、何時になきやさしき音に、小千代は何となう氣味わろく、ほんに心にもあらで伴ひまゐられ、老のこゝろをいたますする妾のこゝろのわりなさ。ゆるしてとて、袂を絞ばりながら、遙か彼方の家に伴ひつゝも、振りかへりつゝ、あとにたちつして、伺へど窺ふほど、朴平の身のやつれやう、影を伴ふこゝろして、小千代はうゝろに夢か現かと思ひたどりぬ。

れやれつれさまにやと、目ざとく迎ふる下女に、少

しく笑みをこぼして、つと奥の部屋に通り、襖間明けて朴平かといふ聲もはづかしげなり。

床の間に、ちがひ棚つきたる此の家の奥座敷と見らるゝ、八疊の部屋の椽近く、机をすゑ、流石文に迎ひをる文雄、朴平とききて僅にふりかへり、にがき笑みを粧ひ、大儀なり朴平、さこそは尋ねまどひしならめ、定めしつかれもしつらん、小千代、葡萄酒にてもとあるに、瓶、高脚盃にそへて、玉子、菓子等を持ちはこびぬるもこは〳〵げなり。

朴平は、何も云はず。暫時は默然たりしが、涙と共につぐ酒を飲みほして、若殿、何も〳〵朴平のかまへしあやまち、今こそ悟りて候へ。今よりは、御家を淸め奉らむ。どうぞ明日は歸らせ給へ、若殿、歸りて親御の御家守せたまへ。朴平、ちよんまげを剃り、御側を淸め、偏に待ち奉れどとて、から〳〵と笑ひ粧ふに、親の家も何も入らぬ。何のあの如きの家、蛇にとらするがよきは。やよ、小千代、巳れは湯に行く。朴平もあびずやと、手拭ひ取らせて出で行くうしろ影、見送くりてはら〳〵と疊をたゝく朴平のなみだ、小千代も汲みて去ぞらくは共にむせびしが、朴平殿、明日は自らが身を捨てゝも、きつと戻らせ參ゐらすれど、さやうに心な痛めでとて、なぐさめ顏なるも殊勝なり。

文　林



螢　　德大寺實則

夕まぐれともし火けちて端ちかく
　かよふほたるのひかりをぞ待つ

夕卯花　　久我建通

くれ初るころにしあれどうの花の
垣根ばかりはゆふやみもなし

朝梅雨　　佐々木高行

今日いくかふるさみたれにおさ鴉
ちからなげにもなき渡るかな

遠郭公　　前田利嗣

遠方をなきてすぐらんほとゝぎす
われのみきゝしよはのひと聲

夏雲　　高崎正風

さみたれははれんとすらし足引の
山見えそめぬくものたえまに

夏雲　　松浦詮

かさなれる嶺こそ見ゆれ水無月の
照日かしこきそらのしらくも

雨後夏月　　西三條實義

夕だちにあつさ忘れしこのゆふべ
つきのかけさへ涼しかりけり

閑庭梅雨　　宮地嚴夫

梅雨にふりこめられてよもぎふの
にはをのみ見てくらすころ哉

池上夏月　　阪正臣

蓮葉はまだしげからぬいけみづに
うつれる月のかげのすゞしさ

竹風　　鎌田正夫

夕づきもはてしに見えてくれ竹の
よかせ涼しきにはのれもかな

雲　　小出粲

大ぞらにのぼらん龍のいきはひも
はかなき雲ぞたのみなりける

雨夜燈　遠山英一

たゞひとつみゆるあまよの燈火は
消えたるよりも淋しかりける

船　水野忠敬

一筋のけぶりをあげてはるばると
海原はしるふねもありけり

海邊興　諏訪忠元

あまの子に打ましりつゝ潮干がた
こにあまるまて貝やひろはん

五月雨　林甕臣

久かたの天つ日のめも富士の嶺も
いつ見しまゝかさみだれの空

伊豆の國めぐりして　大畑弘國

しらくものいづの群山ふみさくみ
國のまほしをけふ見つるかも

人傳郭公　三輪義方

ほとゝぎす雲のよそなるひと聲を
けふやま人のつてにきゝつる

陣中夏月　藤井行麿

たゞかはで月見るよはは夏いくさ
あつきたむろも涼しかりけり

照射　仝

燈さすやまにさつをはさをしかの
角のみじかき夜やなげくらん

一の宮御息所　佐々豐水

あはぢのや武島の波のなみならぬ
歎きのさきりえのびてそやれ

夏草　足立正枝

吹く風にすがたすゞしく繁りあふ
庭のなつくさからすもあらなん

馬上聞時鳥　　草野隆道

いさみ行駒とめてほとゝぎす
なきしあとにもかへしつる哉

水邊螢　　仝

やり水にちりてながるゝ卯の花の
ゆきの上にもとぶほたるかな

活動寫眞　　木庭芳香

駒のあし鳥のつばさもとゞまらず
ゆきかふさまをその儘にして

田家春事　　安齋篤敬

打ちかへすなはしろ小田に春風の
種まくぞかりかせさそふらん

首夏月　　龜谷行一

おほぞらの霞はきえてはやかはの
すゞしきみづに月ぞながるゝ

三浦大介　　黒崎仙太郎

あつさ弓はるは三浦のおきなぐさ
もゝとせすぎしかまくらの里

船納涼　　近衛貞子

すゞみする舟おほければ隅田川
小夜ふくるまでにぎはしき哉

竹裏螢　　鍋島榮子

竹のはにたまりし露と見るばかり
すがるほたるのかげぞ涼しき

海邊郭公　　蜂須賀隨子

荒いそのなみのひまより一こゑを
うち出てなくはほとゝぎすかな

田家梅雨　　前田朗子

梅雨もいとはざるらんさなへとる
しづが小笠のかずあまた見ゆ

池杜若　西四辻茂子

行はるをこゝにのこして燕子花
はなさき匂へいけのいはねに

岡夏草　小池道子

夏くさのたかくしげりて岡越の
みちは手笠もさゝれざりけり

深夜蚊遣火　松平健子

蚊遣火のうすきけぶりに短夜の
ふけゆく空もしられぬるかな

池夏月　南郷柳子

池水につきのすむ夜はかしましき
かはづのこゑも涼しかりけり

遠時鳥　中牟田常子

立花のにほふあたりをよそにして
くもゐはるかに鳴ほとゝぎす

杜蟬　鶴久子

風かよふ杜のこかげにやすらへど
せみのなく音も涼しかりけり

田家翁　柳原愛子

ゆたかなる田中のいほのしづのをは
よはひにさへもとめるなり鳧

深夜螢　税所敦子

さみたれの雲まの月のかげふけて
つゆけき庭にとぶほたるかな

朝まだき夕顔の咲たるをみて　田邊和氣子

あさつゆにさく夕がほの花見ても
進みゆく世のほどろしらるゝ

夕煙　安東菊子

我せこのかへりをまつの下かげに
たつは夕けのけぶりなるらん

魚舟火

わたの原波間にうかぶいさり火の
きゆるは魚のいのちなりけり



仝

岩代國保原なる菊田和平が七十の賀に歌よみて書そへつる詞

本居豊頴

紀伊國の岩代の松は、有間皇子の常ならぬ故事あれど、それには引かへて、東なる岩代の保原なる菊田松翁は、ことし七十年にみてるよはひを、菅の根の長き春日まち得て、ことほきの宴すと告げをこせつるまゝに、をのれもよことをのべむとす。翁ははやくよりわか父翁に従ひて、年ころ學の道の八十隈をわけて言葉の林に花の五百枝をかさし、またつねに、百八十の教子をみちびきいそしめるが、ことに養蠶のわざにも精しきは、なほその糸のうちはへて、長き齢をたもつへきしるき、草木の花のうつし繪にすくれたるは、そのやちくさのかぎりなく、よはひをのべに榮ゆべきゆゑよしなるへし。家の名は、七重八重千世の香めてたきくさはひと、千町五百しろかぎりなき足穂の小田とをつらねたゝへ、家の内和み平らげきか上に、葉かへせぬ松の翁とさへ名にをひつゝ、さきはふ文字の福島の縣、かきはときはの岩代の國にすめるは、八百萬の神たちも、かねて翁か爲に所を得しめ賜へる深き契りあることならん、かゝれどいにしへ人は稀なりといひけん七十年の齢も、翁がためには、菊ならぬ此春の日に生そめたる若苗の如く、松ならぬはつねの小松の若緑にて、與つ御年の長五百秋の末の榮は、いと遥に遠しとぞいはまし、かくてことほぎの歌は、物によせてをのが

じゝ意のまゝなりときけど、鶴の繪かける扇にそへ
て

　末ひろくさかゆる家の春かせに
　　千世をうたひて鶴もまふなり

また、松竹梅のあやあるふくさにそへて、ふくさを
物名に

　はるかすみつゝめどあまるうれしさに
　　にほふ草木の花もゑむらん

短冊にそへて、たにさくをもゝの名に

　春を經ていろかあらたにさく花は
　　こと葉の園に君ぞをるべき

あふさきるさ（一）

五十園の德文

師の翁うせ給ひて、後れたる姫の刀自ひとりなるに、よはひさへいたくかたぶきにたれど、家のうちとの事ども、たすけてことゝりまかなひてよとのたまはするに、いなみまつるべうもあらず。旅のかりずまひにていとさゝやかなれど、たやすく家をとぢて妻とともにまゐりつかへつ。さるほどに、故郷におはすなる養母の君病にわづらひて、ふしたまへり。胃癌とてたやすからぬ病なり、とくかへり來ねよと、郷柄の良司ぬしおなじき義子とじより一日がうちにふたゝびまで消息おこされしかど、やすからずとれどろきていとまこへども、こなたも姫ひとりなれどてをしみたまふめるもさることなめり。門人もあまたあれど、さるべき人をよひどりたまへ、親のやめるに子いかでかやすからんとしひてこふに、さらばとてゆるしたまひつ。さすがにこなたもはなれうく、さりとてふるさとの方はたいかにぞと心もおちゐ

ず。六月の五日の日つとめて橋場の里をたつ。空かきくもりたるに雨もふりいでぬ。

今はとてわかるゝそでをいかはかり
　ぬらせとふるかけさのむらさめ

ふたつある身ならましかはけふのこの
　かゝるあめにはぬれさらましを

本所にいたりて、こゝより滊車にのる。雨なはやまずふる。中川利根の川にわたせる橋もすぎて、市川、中山、船橋の宿など、車のとゞまるごとに、外面のかたにてよばゝる聲にぞしらるゝ。幕張といふほどに雨すこしやみたり。まどのうちより見出せば、小野のかぎりは麥生にて、ひばりのなく聲雲ゐにきこゆ。

ひばりなく小野の麥生は色つきて
　たりはゆたかになびきあひにけり。

とうめくほどに千葉なり。寒川曾我をへて、生實の松の林の間をすぎ土氣の墜道をつらぬきて大網、本網をすぐ。橘の神社もけふは車ながら拜み奉る。午後の一時すぐるほどに茂原の宿につく。まづ大和屋といふにいりて、ひるげものす。あめなはれひきてしきりにふるに出立つべくもあらず。困じてながむるほどに、日もはやいたくたけて、たゞんもはしたなれど心ならずも今宵はこゝにやどる。やう／＼くらうなるまゝに雨いよ／＼ふりまさる。旅人の來やどるもすくなかるめるにや、いとしめやかにて、さびしさいはんかたもなし。よもすがら枕にかよふは、軒のしづくの音ばかりなり。

（未完）

―――○―――

禮

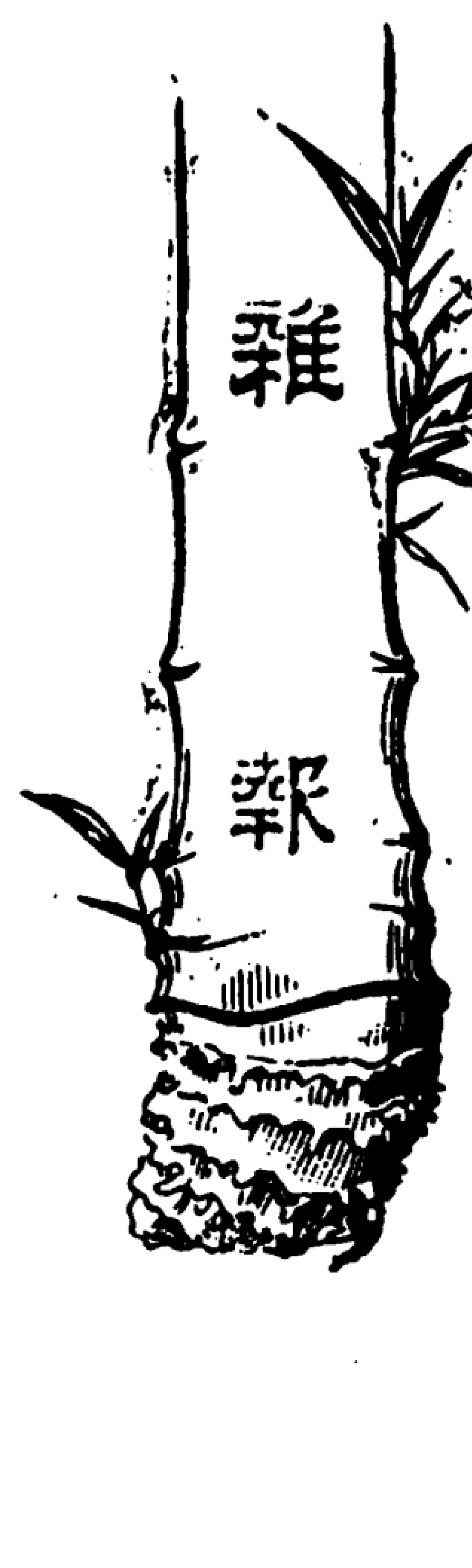
田邊和氣子

禮儀作法は、外は容ちを優美にし風采を崇め、内は

よくれのが身のほどをかへり見、德儀を元として、恭敬、親愛、誠實、懇篤のこゝろをもつて人にまじはりなせ、すぐることなく、たらざるなくして、世の風俗につき機に臨んで時宜に從ひ、作法を應用し、行ふにいたりなむかし。哀れ人たるもの、片時もかくべからざるは、禮にてこそあらめ。禮を知らざるは人にあらず、はた精神なき禮儀を行ふものは、いまだ此道を知らずとやいふべからむ。

いたづらにぬかづくものはうかれめの
うきて世わたるすがたとや見む





●御池の御遊舫　過日來調製中なりし京都御所御池の御船は去十九日を以て竣工し御船に水を滿たしめて檢査せしに、其成績良かりしを以て、去廿日午前十時數十名の工夫之を御所內に擔ぎ入れ、內匠寮より侍從へ引渡し、撿分滯りなく相濟みたる上、侍從より其趣天聽に達せしかば　陛下には殊の外御滿足に思召され、この日天空晴朗なりしを幸早速侍從武官の御陪乘にて、稍暫し御池に御舫遊あらせられたるが、引續き翌日も浮べさせ給ひしよしに承はる。

●皇太子殿下の御成年式幷御健康　皇太子殿下に

は本年八月三十一日を以て滿十八歳にならせ給ひ、皇室典範第十三條に依り愈々御成年に達せさせ給ふに就ては、古例に依りて盛大なる御成年式を行はせらるゝ筈なれども、目下尙は宮中喪中に屬するを以て當日は只御儀式をのみ執行せられて、明年二月十一日御盛典を擧げらるゝ御都合なりと洩れ承る。又殿下には、此一兩年間、玉躰兎角御不例がちの處、本年初春より、葉山御用邸に御療養ありてよりは、大に御健康に適し、目下は至極御壯健に渡らせられ御躰量の如きも十三貫目に餘らせ給へりとぞ。又此の程は、經典、日本歷史、支那歷史などを御研究遊ばさるといふ。かしこき御事にこそ。

●英照皇太后陵竣功の期　内匠頭堤正誼、諸陵助藤田健の兩氏は去る十九日午前十時より京都御所なる宮內省の會議室に於て田中次官、花房帝室會計審査局長、山崎調度局長、渡邊內藏頭、戶田諸陵頭等と集會し英照皇太后後月輪東北陵御造營に關する費用及造營落成の期限等に付協議せしが御造營の期限は明三十一年一月十一日御一周年祭御執行前までなりしも斯ては其前に行はせらるべき新陵御告祭などに差支ふべしとの議起りて旁々竣功期を本年十一月三十日迄に短縮せしむる事に決したりといふ。

●英國女皇即位六十年祝賀式　大不列顚愛蘭聯合王國兼印度國皇帝ヴヰクトリヤ陛下の即位六十年金剛石祝賀式は先月廿二日を以て、英京倫敦なる、聖、波羅寺院に於て執行せられたり。吾等姉妹。他邦人なりと雖、亦締盟親和の交誼によりて、聊か此の榮典を遙に祝しまつる。英皇の皇子孫に富み給ひて枝葉の蓁々たることは屢々記したり。而して陛下、今年は御年實に七十九、在位即六十年、しかも元氣猶衰

へず、よく大國を安らか統べ給ふこと、まことにめでたき限りなり。

今祝典の御順序を承るに、本月二十日ウィンザル宮に於て禮拜式を行はせられ、二十一日を以て英皇親から倫敦に臨幸ありバッキンハム宮にて各國の參列大使に謁見を賜はり愈二十二日午前十一時バッキンハム宮を出御あらせられ、八頭の龍車鹵簿壯麗を極め、徐々各市街を御巡回あらせられ、遂に聖波羅寺院に至りて此處に祝賀式を擧げさせらる。明二十三日はバッキンハム宮に一大園遊會を催され、二十四日を以てウィンゾル宮に還幸ありたりといふ。各國みな大使を派して、その賀を表す。我有栖川宮殿下亦この中に加はり給へり。英國亦榮といふべし。

●女子高等師範學校生徒募集　女子高等師範學校にては一年生に缺員あるにつき、來る九月、該校に於て試験の上十二人入學せしむといふ。志願者は左記の事項承知の上、願書に履歴書を添へ、來る八月十五日限該校に申出つへし、但し詳細は同校に就き承合すべしとなり。

一入學志願者資格　尋常師範學校二箇年半の課程を終へたる者、若くは之と同等の學力を有する者にして、年齢十六年六箇月以上二十一年六箇月未滿の者

一尋常師範學校卒業生服務義務年限中の者、及現職あるものは、本屬長官の許可書を入學願書に添付するにあらざれば受理せず。

一入學試験科目及時日左の如し。

九月二日	午前八時ヨリ	體格	午前十時ヨリ	音樂 單音唱歌
同　三日	午前八時ヨリ同九時半マデ	漢文 解釋		歴史 本邦
	午前十一時ヨリ十二時マデ	習字 楷、行、草、平假名、		
同　四日	午前八時ヨリ同十二時マデ	國語 文法解釋作文	午前十時ヨリ同十二時マデ	

裁縫

同　六日　午前八時ヨリ同九時半マデ　數學　算術　午前十時ヨリ十二時マデ

圖畫　毛筆　鉛筆

●孝婦とり女　丹波の國氷上郡、前山村なる澤田庄三郎の養女に、とりといふものあり。同じ村なる善右衛門の二女なりしが、この庄三郎は伯父にて、子なかりければ、とりが七歳の時貰ひて養女とせり、元來庄三郎は性かたくなにて、持病さへあれば、これに事ふること容易ならず。されどとり女は利發なるに、まして柔順なる質なりければ、幼少ながらも世の常の女にはまさりて、養父に事ふることも、いと忠實なり。されど末頼母しき娘よなどゝ、近隣のもの皆言ひあへりき。

庄三郎の妻は、名をとみといひて賤しからぬ家に生ひ立ちしかど、分別もありて、とり女をいつくしみけれど、とり女も亦ひたすらに頼みとせり、さる程に、一年とみは假りそめの病にかゝりて、打臥したりしが程なく回復しければ、皆々喜びあへりしに、そのかひもなくて再び病の床につきたり、此度は大病の体なれど、とり女の驚き一方ならず、日夜傍をはなれずして、介抱怠りなけれども、其甲斐も見えずして、病は日々に重り行く程に、其年の暮つ方、かなしみまどふとり女を殘して、遂にあへなくなりにけり。

死にし人のあはれは今更に言はずもあれ、なほ取りわけてあはれなるは、とり女なりかし。七歳の幼少より、かたくなゝる養父の許になりがたき辛抱せしも、一はかたはらにやさしき養母のいませしが故なり。さるを今この養母を失ひて、此より將た誰をたよりに暮さん、まして二年前生れにたる幼少の義妹

さへある中なるを。

さりながらかくいひかく思ふは、只他人の憶測のみとり女は更にさる思ひをせず。昨日にかはりて事々に不自由せらるゝ養父の上を思ひやりて、いとゞ甲斐〳〵しく立はたらきて朝に夕に種々に慰めつゝかたはら義妹をはぐくむこと、實姉も及ばぬばかりなり。かくてあること十年になりしかば漸く義妹ものびやかになり、とり女もよきほどに年たけたれば、今はとて養父の進むるに任せて、直吉といふ婿を貰ひて、家を治むる事とはなりぬ。

これより夫婦の中殊に睦じく、日々共にかせぎて、或は養父に、或は義妹に、あらゆる心を盡しつゝ、過す程に、不圖直吉は思ひ付きて、舅とり女等の止むるをも聞かず、商法にたつさはりしに、元より得慣れぬ業とて、忽ち失敗を重ねて後には莫大の損失となり、遂に田畑迄も賣却せでは止みがたきに立至れり。

さらでだに六ヶ敷養父の、まして直吉の損失よりは、いとゞ不足のていたらくにて、晝に夜に事あるごとには必ずこを言ひ出でゝ、家に波風の絶間なければ、とり女の心痛此上なく、養父の立腹も無理ならねど夫の散財ももと商法の爲めよりなれば、また一わたり理なきにもあらず、何れをいかに言ひ説かん術もなくて、只其間に介在して、獨り心を打砕けり。かくて一年あまりにして、つひに直吉は不縁となれり。とやせん、かくやせんとあるにもあられざるとり女の苦心も、今は空しく徒勞となりて、あはれさきのさき迄も苦樂を共にとたのみし夫にかく意外にも別れしとり女の胸中、れもひやるだにあはれなり。されど柔順にして孝心深きとり女は、こを以て養父

を無慈悲なりとはせず。只此迄と思ひ定めて、義妹の既に人と爲りしに養子して家を讓り、以て養父を安んせんと、さるべき人々に相談して、さて隣村の人房太郎といふをとりて義妹に配して、家を續かしめ、おのれは養父を携へて、程遠からぬ處に隱居して、或は實家より呼戻さんとし、或は諸所より再婚を進むるをも程よく謝絶して女ながらも養父に代りて、山に、畑に、男子に等しきはたらきをして、あまつさへ夜は、近隣の人の衣の仕立ものを引うけて夜半を過し、朝は未明に起き出でゝ、豆腐などを製造して、なりはひの助けとなし、及ばん限りの美味を調へて、養父を慰むるなど、用意至らざる所なく身はいまだ三十路ならざるに空閨を謹み守りて、可惜人生の半を榮華のそとに、養父の素志と、おのれの素意とを飽迄も盡し去らんとす。

あはれ當世の人情浮薄、殊に女俗の頽廢して、外は窈窕たる淑女ともいふべき裝して、而かも行はこれに似もつかぬものあれど、朝の夫は、夕の他、或は再嫁し、或は三夫に見ゑ而して却てはかりごとを得たりとするたはけをみなも多かるに、親に對し、夫に對し、終始志操を變せさる事、松杉の色にも比へつべき、とり女が如きもの世間幾多の婦女子中、將た幾人かある。　丹波　近藤常吉投

●孝女友　廣島縣佐伯郡、嚴島、宇幸町に名を友と呼ぶ孝女あり。兄なる松田萬次郎は嚴島神社へ參詣する者の案内を業として僅に細き煙を立てけるが去る廿四年に、妻のゆきは、子供三人を殘してみまかりければ、跡には老母もあることゝて、萬次郎の一手にては母に孝養を盡し、且つ三人の子を養育することの困難なれど、他家に奉公中なりし妹のお友

を呼び戻して、母や子の世話を依賴したるに、お友は世にも稀れなる孝女にて、母に對する取扱の懇ろなるはいふに及ばず、小供等に對しては産みの母親も及ばぬほどの慈悲を掛けて守り育つるより、萬次郎も大に心を安めけり。然るに、昨年より母は病に罹り、一命旦夕に迫りけれど、お友は晝夜枕邊を去らず看病したるが、元より貧苦の事とて醫藥の手當さへも充分に施すこと能はざるより、お友は母の病を看護る遑には、夜の目も寢ずに縫針仕事をなして勞はりしも、定まる命はもだしがたく、母は遂に死去したり。泣く〳〵野邊の送も營みけるが、其後、復、兄の萬次郎重き病に臥したるにぞ、お友は苦勞を憂しとも思はず、最と親切に看病し、夜は相變らず賃仕事に僅かばかりの口錢を得て、醫藥の料は云ふに及ばず、小供等の世話迄引受けて不自由かけず養ひ居るといふ、誠に婦女の龜鑑なりかし。

●世界一週旅行の日數　現今世界を一週するには、最も迅速に旅行するを得る通路に由るも、凡そ六十六日間を要するが、千九百年、西伯利鐵道の完成する曉には、三十三日にて世界を一週し得るに至るべしといふ。即、現今の通路と將來の通路とに要する旅行日數を比較すれば、

現今の通路

紐育よりサザンプトンまで	六日
サザンプトンよりブリンヂシーまで	三日半
ブリンヂシーより蘇士及印度を經て横濱まで	四十二日
横濱より桑港まで	十日
桑港より紐育まで	四日半
合計	六十六日

將來の通路

紐育よりブレーメンまで	七日
ブレーメンより彼得堡まで(鐵道)	一日半
彼得堡より浦潮斯徳まで(一時間に附き平均卅哩)	十日

浦潮斯德より桑港まで　十　日
桑港より紐育まで　四日半
合　計　三十三日

●曾根公使の教育談　特命全權公使として久しく佛國にありし氏は曩に歸朝せられし處頃日氏を訪ふものありて種々の意見をきゝたる中に普通教育に就て左の如くかたられたりといふ。

日本が世界の無臺に登るに要する國民の智惠、精力、活動は之を勇健なる体力に求めざるを得ず乃ち幼男幼女より先づ最も体育に注意せざる可らず就て普通教育にも大改正を要する點あり

第一は就學年齡を遲くすることなり、發育盛りなる幼兒の狹き頭腦中へ種々の雜物を詰め込まんとするは酷なり其の結果や痛く健康を傷ね其の終生の發達を害すべし余等の幼時には醫術も餘り開けざりしが故に平常の攝生も亂暴に流れて少し孱弱の者は皆夭折し割合に强壯無骨なる余等のみ生存せるも今や文明の餘澤醫術大に進步して孱弱の兒童も生育し隨つて一般に昔より身心の不健康なる者多くなれるに此の上尚は幼時より學問攻と爲さむ彌よ体力不完全の國民を造り出さゞるを得ず此の弊を避けんには先づ主として幼兒の就學年齡を遲くすべし。

余が實際見たる所によれば歐洲諸國の就學年齡は大抵日本と同じく滿六歲（中には滿七歲なるもあり）なれど日本の入學期の四月なるに反して彼の國にては十月なるゆゑ事實に於ては滿六歲半乃至滿七歲にて入學することとなり日本に比して恰かも半歲乃至一年遲し歐人の割合に强壯なる此の一事亦その一因なるべし故に余は就學年齡を滿七年

位に改めんことを望む
今の如く滿六歳より就學し十歳にして尋常科を畢り十四歳にして高等科を畢るは餘りに早し今一年を遲くせむ就學者に取て始めこそ損の如くにも思はるれ体格强壯腦力健全なるを得てその結果は却つて中學以上大學に於て好成蹟を看るべし
次には學科の減少することなり、狹くして弱き兒童の小腦へ何も角も詰込み押込みて増々孱弱ならしむるは亂暴ならずや現に歐洲にても日本の如くに多くの學科を授くる小學校を見ず
總て學生は体育を主として强壯健全に發達せしむべし早くより學問責をして片輪の神童のみを作らむ斯の日本を奈何せん世界の舞臺に立つて優者の地歩を占むるなんど夢更思ひも寄らぬこと、敎育家及び經世の心あるもの切に注意を要す。

●本號の附錄　豫て告げたりし、安藤朴翁のひたち帶は、いよ〱本號より掲載す。尙、讀者諸氏の便りにもとて、はじめに翁の畧傳を附記せり。

◎女子の友　第一號　本郷　東洋社發行

現今女學雜誌を發行するもの其の數尠からずと雖、多くは宗教的會報的講義的にして、したがひて各言ふ處も一方に偏し、嚴正中立眞正に日本女子の良師友たるもの甚だ尠し、今石川正作氏「女子の友」を發行して、此の欠を補ひ專ら女子教育の機關たらんとす。趣意の終りに「女子教育は未だ研究中に在りていたらぬくまも多ければ强ちに己の見のみにて萬事を定めず紙面を研究場となす」といへり。いかゞはしくは思はるれども、女子の友なるからは免かれざる事か、兎にも角にも、女學の爲に今一友を得たること誠に喜躍に堪へず。掲載する處は、論說、家庭、史談、學藝、童話、敎育、小說、漫錄、文園、雜報の諸項にして、口繪には紫式部の畫像あり、大に見るべし。論文には野口保興氏の「女子教育」三輪田眞佐子氏の「詩想と女子」あり、讀むべし、尙体裁に於てあきたらぬ處あれども初號としては先整へりといふべし。定價八錢毎月二回發行



敎の庭

七月五日兼題　山内一豐妻

天

いさましくいなゝく駒のひと聲に
　君かみさをの名こそたちけれ　横濱市相生町四丁目　三谷起美子

地

乘る駒も主もいさむをいへなから
　見送るいもかこゝろいかにそ　東京日本橋區濱町二丁目廿四番地　諸井くら子

人

勇みたちたてがみなでつ乘る主を
　かひありけりと妻や見るらん　東京麴町區元園町一丁目三十六番地　小曾根しう子

秀逸（十五首）

ひめれきし鏡のうちのこかねこそ
　後の世てらすひかりなりけれ　高島壽子

馬代にそなへしきみかこゝろこそ
　黄金にまさるたからなりけれ　池田幾子

あら駒を夫に得させしいさをしは
　千世のかゝみのをみなへし哉　山田瑋子

ひめかゝみ秘めし黄金のありて社
　我脊子世にはあらはれにけれ　仁保志磨子

まもりなるかゝみのうらの山吹に
　花も實もある名をそあけける　美奈井芳子

ひめおきしかゝみの箱の黄金より
　深きこゝろはあらはれにけり　永井さい子

世の妻のかゝみの山のこかね路に
　千里のこまもとゝまりにけり　富士村幾子

乘るこまのいなゝきよりも彌高く
　君かみさをそ世にひゝきける　中澤ちの子

こかねより龍の馬よりたふときは
　深きこゝろのひめかゝみかも　村治みき子

ものゝふのつまの鏡そうきにたへ
　黄金にこまをかへしはまれは　中桐さやう子

得かたかる駒を易すくつなき得て
　世にたかき名をのこしける哉　田代艶子

千里ゆく駒あかなひしこかねより
君かこゝろそたふとかりける　廣田とめ子

取り出てし鏡のうらになつかしき
こゝろの色はあらはれにけり　林　久子

今もなほ世にこそ殘れこかねをは
こまにかへたる君かみさをは　上野　君子

取り出てし御馬の料のなかりせは
ちよの功をいつかたつへき　弘田ゆき子

（以下原稿到着順）

もとめにし駒のいなゝく聲よりも
みさをは高くよにきこえけり　木川　里子

いなゝきし馬の聲にもまさりつゝ
君かほまれのたかくもある哉　住山　幾子

大かたの今のをみなのかゝみにと
香りのこしゝをみなへしかな　春野　梅子

馬しろと夫にさゝくるはなの色は
こかねにまさる光なりけり　福原　菫子

武士のこゝろのこまをいさめしは
君かかゝみのひかりなりけり　佐々　琴子

土佐の海にいななき高く聞えしは
駒ひきたてしちからなりけり　佐々有鄰子

たくひなき黄金の花のさき出てゝ
千里のこまをとゝめけるかな　香川　頴子

君なくはこかねの玉もうるはしく
ひかりかゝやく時あらめやも　伊藤　清子

せの君につくしゝ深きまこころは
よにもかくはしやまふきの花　尾立　富子

くもりなき女のかゝみあつちより
いてゝ彌々よもにてりそふ　小杉　浪子

あかなひし駒のあたひの黄金こそ
やかても家のひかりなりけれ　大竹　治子

貧しかるみも妻ゆゑに身を立てゝ
のちの世までも名を知られ皃　栗生さく子

秘め置きし手筥のきかね時をえて
世にあらはるゝ父のたまもの　田中ゑん子

こがねより猶かゝやきて見ゆる哉
かゝみにうつるまこゝろの花　中山かず子

世をふれど其名はたかしひめまつの
みさをと共にたてしいさをし　竹村　貞子

いまはとて心つくしのこかねにろ
ひきとゝめたるかひのくろ駒　玉井　隆子

眞心をこめてひめにしこかねにも
まさるは君のひかりなるらむ　石川　頼子

たらちねの惠みの黄金ひめ置きて
今日あることや君はまちけむ　石川　樂子

千代をへし後の世までも忘られ凫
よきこまねたる君かいさをは　石川　久子

うるはしきやまとこゝろの鏡そと
をさなき子まで仰きつるかな　綿野りき子

ものゝふの妻のかゝみと君かなの
匂ひはたかしのちのよまでも　西　艶子

わか夫に盡すみさをゝやまの井の
深きこゝろにくみてこそしれ　安井らめ子

我かつまにつくす心のますかゝみ
こかねの色にあらはれにけり　馬島千鶴子

たらちねのれやの敎をまもらすは
こかねの花もにほはさらまし　河野　文子

八千草のつゆにきはひてなく虫も
きみかみさをそめで傳ふらん　井澤たを子

榮ねゆく深き根さしどなりつるは
駒にかへたるこかねなりけり　西元とも子

言の葉のはなも千年にゝほふらん
名さへ黄金になをまさりつゝ　西元　花子

一すちにれやのをしへを守りてそ
こかねの心あらはれにける　富士村ひさ子

人妻のこまにかへたるこかねには
家のさかねのはなそ咲きたる　吾妻ちか子

世の中の人にこゝろもますかゝみ
たからに駒をかへしきみかな　館脇ます子

武士のこゝろいさみて乘るこまを
れなじ思ひにつまや見るらん　池谷とみ子

たくましきくり毛の駒に乘る主の
むちにやあけん妻のみさをを　柳田さと子

いさましくいななく駒の聲よりも
高きは君か名にこそありけれ　田代　綾子

武士のひかり添へにしをみなこそ
やかて千とせの鏡なりけれ　西田ことみ子

黄金より猶もみさをはますかゝみ
かゞやき渡るよろつよまでも　下村　貞子

ものたらぬ心ぼそさもたへ〳〵て　こかねはなさく折やまちけん　名取正代子

君かその心そ世々のかゞみなる　そこのこかねも光りましけん　坂田きみ子

たらちねの教まもりてひめれきし　こかねはやがて君のひかりと　森　雪子

とり出てて世に光れるはせこの爲　駒にかへつるこかねなりけり　宮地　琴子

ひめれきし黄金にかへて得し馬は　ちよに女のかゞみなりけり　近藤　好子

貧しきは移り行く世のならひとて　ひめし黄金もせ子のためこそ　近藤　松子

黄金をも駒のしろにとをしまぬは　かそのをしへを守るなりけれ　宮本　貞子

玉くしげかゞみにひめし操こそ　今もをみなのかゞみなりけり　春永幾志子

うき時も忍びまちにしかひありて　つまが花さくはるはきにけり　高田さと子

せこのためつくす誠のかゝみそと　後の世までもうたはるゝかな　林　常子

つまのためつくす心のまことこそ　黄金よりなほたふとかりけれ　植木　銅子

かゞみより取り出す金の光りにも　いとゝみさをは勝りぬるかな　林　琴子

やさしくも夫を扶けしいさをしは　たぐひもあらぬひめかゞみ哉　川中たづ子

けなげにも夫を扶けしひめかゞみ　くもらぬ名こそよゝに高けれ　川中まつ子

ひめれきし黄金の花はくちなしに　千代まで匂ふつまのまごゝろ　日吉あさ子

少女子の鑑なりけりひめれきし　こがねにまさる妻のまごゝろ　水上　仲子

ろこふかききみがこゝろに武士の　いなゝく駒のほまれこそあれ　穂積　玲子

曇りなきかゝみの内にあらはれて　ますら武雄そいやいさみける　伊東美代子

ひめれきしたからにまさるひめ鏡　かけてあふがん君かみさをを　服部勝美子

せこのためこまをかひつる心にそ　こかねにまさる光りなりけれ　北村左枝子

高き名はいつる黄金にますかゞみ　北村てい子
うつるみさをのかくはしき哉

操こそうまの代にて見ねにけれ　北村孝子
赤きこゝろのれくのふかさも

はれやかに出て立つ時の駒にこそ　九里みち子
妻のこゝろも乗りてゆきけめ

のる人のこゝろも共にいさめるは　小島ろく子
つまのみさをに買へる馬ゆゑ

夫のため名をあけさせし君こそは　石川すけ子
萬代までのかゞみなりけれ

君こまをせこにかはせし君か身は　植木とよ子
實にこそ妻のかゞみなりけれ

昔よりつまのかゝみはをほけれど　植木はな子
君か仕わさはまれにぞあり皃

今もなは殘るいさをはもの丶ふの　戸塚てつ子
つまてふもののかゞみなり皃

高知山やまのさくらのはなよゝも　萩原章子
よに匂ひしはきみにこそあれ

七月五日兼題　作文の添削乞をふ

天

筑前國嘉穂郡飯塚町　林久子

よはなれたる山さとに、家居をうつし侍りしより、萬つれ〲なるまゝ、野山のけしきなど、をりにふれつゝ、文につくり侍れど、言の葉のとゝのはぬところなど、わきかたくはへれは、見せ奉るもいと耻かしう侍れど、此まゝはことなさんも口惜うはへれは、御暇の折、よきに御筆を加へさせ給ひてよ。あなかしこ。

地

栃木縣日光町　黒瀬春惠子

先つ日、いとまあるにまかせ、近きあたりの名所をさぐり侍りしに、聞きしにもましてれもしろきふし〲數多くあなるを、一時のたのしみとすごしぬるも、あかぬこゝちせられてなん。されど、たゞ心に浮みしまゝを、むつかしくもかきつらね侍りぬれど、御いそかはしき折から、いと心苦しうははべれど、ゆるやかにおはします程に、御筆を加へさせ給はゞ、いと〲うれしうてなん、あなかしこ。

人　横濱市相生町四丁目　三谷起美子

日々にまさりゆく此の頃の暑さ、いかに凌がせおはしますらん、久しくとだえ絶らせし罪は、よきにゆるさせ給ひてよ。さて、故郷に歸り侍りしよりは、もろともに文學ふべき友とても候はねど、只朝夕に見聞きせる花鳥のあはれを、いさゝか物に記しおき侍りしに、今は手箱にあまるまで積り侍りぬ。されど、文の法に違へるところ、言の葉のあまり足らはぬところなどの、數多き誤りをも、とひたゞすべき人も侍らねど、ひとりなげきに沈みつゝ、いよゝ師の君の御めぐみの思ひ知られ候ふ折から、わが家に召し使ふものゝ、今日明日都に上り行くとの事に、喜び勇みつゝ、書きおきける文ども、一綴りとなして、御許に參るを、御いとまの折々、御筆加へさせ給はゞ、まことに身にあまりたる幸にこそ、あなかしこ。

人　三重縣一志郡久居町二ノ町　村治みき子

ふみ讀みえぬ身は、明盲といふなれど、妾の如き文得書かぬ者は、物言ふ啞とや名づくべからん、さりとて、醜き姿ながらも、五体またく具はりたる身をもて、盲啞など呼ばれんは、いとも〳〵いふ甲斐なきことに侍り。まして眞の盲啞すら、讀み書き何くれといそしみ學ぶ今の代に、徒らにかくてやはあるべきと、思ひ侍るものから、固より、てにをはのけぢめをだに知り侍らねど、つらぬる言の葉しどろにて、何事を書けるにか、我ながら分き難きほどになん。されど、教を乞はん人とては、君より外におはしまさず、あはれ情ふかき我君よ、依るべなき片輪の子を憐み給ひて、そが作る不具なる文を、或は添へ或は削りて、初山ぶみの道しるべし給へや、切に〳〵乞ひのみ奉るになん、あなかしこ。

（以下原稿到着順）

木川里子

春秋のあはれなる折ふしにつけて、硯の海にうかび出てたるもしほ草、筆のまに〳〵かきあつめたる腰をれ、もとより初學の拙さは、雪の中に冬ごもりして、春まつ鶯の片言を、文章と名つけんはいとをこなるわざには侍れど、たゞ徒に文車のちりにうつめ置かんには、いよ〳〵この道のすゝむへくも侍らねば、かく御覽に入れまつるを、あら金の土みかけは

とて、玉の光のいづべくもあらねど、いたく御筆加へたまひ、言格てにはなとたゝし給ひて、あはれいさゝかのあやをだにそへ玉はゝ、いと〳〵嬉しかるへく、つゝしみてねきまつるになん、あなかしこ。

福原菫子

中々にきのふ今日は暑たへがたく、梢に噪ぐ蟬の聲さへかしましきに、みけしきいつもながら美しく、文讀む窓にいそしみ玉へる君よ、さきつ頃久々にて妾、播磨なる伯父の許にまかり行き、程遠からぬ書寫山に遊び、其折ものせし一綴りの道ゆき文、をかしからねどしたゝめさゝげまつれは、新しき君がみふでにて、拙なきかど〳〵を、いとゞむつかしとにがみ玉はで、よりく〳〵のみいとまに、よしなにふんで加へさせ玉ひてよ、ひたぶるにねきまつるになん、かしこ。

佐々有鄰子

朝夕の風も枝をならさぬ御代にあひて、片山かげの伏屋に住める妾が身も學の庭の敎へ草つむとはすれど、深山木とともに生ひ立ちて都のてふり伺ひしるよしなけれど、花さきにほふ言の葉なく、露にきらめく調もなく、筆つか短かき初々しきをもかへりみず、敎の師の文机のもとにうすずまりゐて、ふるの山ぶみならぬはつ山ぶみを捧げもちてこひのみ奉るは、添削をこそ、あなかしこ。

綿野りき子

學ひの庭を退きしより、久しうたいめもかなはず、音信さへもれろそかに打ち過ぎ侍りつるを、我が慕ひまゐらする師の君には、御さね〳〵しく文の林をたどり給ふとよ。いとも喜はしき限りにこそ、妾もよし歌まではまゐらずとも、せめて文書く事だにし侍らましと、試みに昔ゆかしき鎌倉に遊ひし事ども書きつらね侍りしが、もとより學びぬ業なれどあやさきにとあやめもわかず、余りに拙き事と、我ながらあやしう思ひ侍れとも、さりとて此まゝに打捨てんもをしく如何で師の君に御筆入を願ひ奉りなた、折にふれてはれのづと文めく事もやあらん、いで〳〵御住家へ持て伺はんと思ひ居りしに、如何にせんとみに去りかたき事の出できたれど、いと〳〵なめげながら便をもて御送り參らすれは、あやしの業とも咎め給はで、御暇の時に、御筆を加へ給ひ

てよ、何れ程近にまかでて、よろづきこゆべくなん、あなかしこ。

東野けい子

歌は幼けなき時より、御ねもころなる御引立により、今も折〳〵は詠み出て侍れど、文てふものは、學びの庭に通ひ居し頃のまゝ、打捨てて、絶ゑて物せさりしを、日頃はらからのやうに交る友の父の、六十路の坂を越られたるを、明日なん祝ひのむしろをひらき、人々に歌こひ、老の樂しみとなさんとて、私には其文かきいてよと切にこはれ侍れど、拙なき筆の及ふべくもあらねど、さのみもいなみ難くて、かきてゝろみ侍りつれど、怠たり居し事とて、誠にったなく、此まゝ送り侍らんも、いとはづかしう侍れは、御筆をそへさせ給はらんことを、誠にとみの事に侍れど、ねぎ奉るになん、あなかしこ。

安井うめ子

此ほど親族なる某の年賀につき、人々に歌文を乞ひてあつめけるに、妾にも榮ゑたる松にことよせて、文を書きてよと、せちに請はれ候へども、妾事は、たゝ學びの庭に足ふみしとの名のみにて、少しも文かく業をわきまへ侍らずと、固く辭みしかど、またしもいひおこせけれど、拙なきながらに書きこゝろみ候まゝ、いたく御筆加へ給ひて、語格てにをはなどの違ひたるを正したまはれ度、御めんどうながら、呉れ〳〵もねがひ上候、先は御たのみむかりかくなん。

吉村ふて子

このごろは、いとゞ暑さのたへがたう侍るを、師の君には、いかゞすくし玉ふらん。先頃より御けしき伺ひ奉らんとおもひつゝ、なめけにをこたり侍るを、ゆるさせ玉ひてよ。おのれ、としごろわけてしたしうまじはり侍る人の家に、昔より侍る松の、いとゞ物ふりさかゑ侍るがゑにもかゝまはしげなるに、このはきぶみかきてよと、せちにこはれ侍りて、拙き筆もて、思ふがまゝをかきいて侍るを、御いとまのひまに、よきになはさせ玉ひてよ。例のおのれが用の事のみ、きこゑ奉るになむ、あなかしこ。

佐治ふさ子

ふりつゞくながあめに、庭の植木も波の下草となり、軒の玉水ならでは、絶ゑて音なふものもなき折か

ら、師の君には、いつも〳〵すこやかにれはしますとか、いと〳〵うれしうなん、はたこゝにも少しのかはりもなく、日をすぐし侍れど、みこゝろ安くればし給ひてよ、扨もこの頃の五月雨に、なす事もなくつれ〳〵なるまゝに、いかで文にてもとて、心に思ふまゝをかいつけ侍りつれど、いとつたなく侍れど、師の君の御言葉を添へもしけづりもし給はゞ、枯れたる木にも花のさかざらんやはとて、奉るになん、かへす〳〵も御筆入れさせ給ひなど、こよなう嬉しう侍らん、あなかしこ。

輕部壽子

其後は、御申わけも御座なく、御無音に打過候、本日はさいはひ日曜日にて、御宅に御いで遊ざされ候由、一寸まかり出御類依申上べき筈の處、勝手ながら、妾事昨夜思出のみ左の通つゝり申し候、誠に文法にもかなひ申さず、御はづかしく候へとも、何卒御心れきなく、宜しく御なほし下されたく願上候、かしこ。

江口とみの子

此頃は、暑さたへかたきほとなるを、師君にはいかにれはしますらん、けさしも若竹のしげれる窓に、ゐはし文よみ侍りしに、いと涼しうて、夏をわするゝ心地せられて、いとあやしき文かきいで侍れど、例の拙なくて、人に見せんもはづかしう侍れど、このあつかはしさに、いとゝ御ねふりやそへんと、れそれ入り侍れど、宜しく御筆をくはへさせ給はん事を、ひとへにねき奉るになん、あなかしこ。

中澤千野子

日にまし暑さきびしう成りまゐらせ候折から、何も様御さはりもなう入らせられ、何よりの御事に存上まゐらせ候、手前一同、相替らず暮し居り候まゝ、御心安う思召下され度候、さて過し頃より、長き日のすさびに浮び出てしまゝを、折々にかきつけ置きしが、やう〳〵此程つゝりをはり候ひしに、いつもながら、拙きには、我ながら耻入候、さりながら、此まゝにやみなんも口惜う、はた後のためにもと、面伏せながら、御高覽をわづらはし候、あつさの折から、いと心なきわざとは存し候へど、何卒御添削願上げ奉り候、何れ近き中伺ひまつりて、御げんもじ致すべき心得に候まゝ、なにも申のこしまゐらせ候、

あなかしこ。

白井となこ子

此の一編は、先頃己か旅のつれ〴〵に、見もし聞きもし、をかしと思ふふし〴〵を、かいあつめしものにて侍り、ことなることなき、文にて、あやまりもさこそ多からめと思ひ侍れど、いつにても、先生の御ひまのあらせ給ふ折に、御添へ削りし給はらど、いとうれしうなん。己さりかたき事の侍りて、え詣うのぼらず、何かしの君の先生のもとにいらせ給ふにつけて、文もて願ひまゐらするになん。なめげをゆるし給へかし、あなかしこ。

白井とま子

同じ都にはすめども、東西にへだたりぬれど、たやすく見えて、みけしき伺ひ參らすることも、おこたりがちなるをみゆるし給へかし、いかにおはしますらん、さておのれ學の園にありし昔を忘れでなど、家事のいとまに、ちりかきあつめつるものを、獨り机の中にのみ埋め置き侍るも、本意なしと、とりいで侍り、いそしくいらせ給ふらめど、憐みて御添削なし給はゞ、こよなう嬉しうてなん、無禮をし顧みず、願ひまつるになん、あなかしこ。

廣田とめ子

日に〳〵すゝみ行く今の世は、をさなき人すら、文よみ物かきなとするに、年たけて、其業知らねどいとはづかしう思ひ侍る。さてこのごろより物學ひせんと思ひ立ちてやう〳〵文二ッ三ッつゞり侍りぬ、されど、言の葉もとゝのはず、文字のあやまりもおはかりなん、されど、御目のあたり出し奉らんも、いと心くるしう思はゆれと、かくてやみなんも、心無き業なれど、拙き筆をもかへり見ず、もたせ上げ候、御いとまの折〳〵、よきに引き直し給はらん事を、ひとへに乞ひ願ひまゐらせ侍るになん、實は、もうのほりて御願ひまつる筈なれど、少しさはる事の侍れは、いとなめけなれど、文してくれ〴〵御ねがひあげ奉るになん、かしこ。

名取正代子

けふいくか日數へにけん五月雨のと、三日五日が程は、日をも數へつれ、かくをやみなうては、はやおよび折らんともおはえず、いとつれ〴〵なるまゝに、日毎に文机の下にのみたれこめて、あやしき文ども

あまたかいつけ侍り、されど、素より拙き筆の、あらぬさとびごとのみ多くて、いかゞはしきふしの澤なるを、いかゞはせん、我山里には、いぶかしきかどとふ人だになくて、たゞ〳〵かなたの鳥のさへづり、こなたのきこりの音のみならでは、山びこも答へ侍らず、いかにあはれとおぼしてよ、さても其君には、文の林いとひろうしめさせ給へるを、とくよりしたはしうこそおぼえ侍りしか。いかでその匂ふ詞の葉の香をだに、うつさしめ給ひなむと、いかにうれしきかぎりならましと、かゝる拙き文もかへりみず、御目わづらはし奉るを、むつかしとてにがみ給はで、よきにみふでくはへさせ給はんを、せちにねぎまつるになん、かしこ。

山崎しつ子

いまだたいめたまはらねど、平らかにおはし給ふとか、いとうれしうなむ。大人には、學の道にいたり深く、御名の高う世にとゞろけるをしたひまつりて、かねてよりみ教うけまほしう思ひつゝも、うちすぐし侍りしを、いつまでかくやはとて、この程、この題をまうけて、作り出でこゝろみたれど、もとよりうひ學びのしわざにて、我身ながらも、あやしう思はるゝを、大人の御筆もて、加へもし削りもしたまはらんには、などか枯れ木にも花のさかざらんやはと、清書してみもとに奉り侍るを、御いとまのをりに、よきにたゞしたまひてよ。みづからまゐでゝこひ奉るべきを、さり難き事の侍れど、いと〳〵むらひなるわざなれど、人して伺ひまつるを、ゆるい給ひてよ。よろづは近きほどにさふらひて、くはしうみ教うけたまはるべくこそ、あなかしこ。

植木鋼子

としころ親しき友の母なる人、をさなきにかへるてふ年の賀のいはひに、何まれをかしき一ふしをも、いひおこしてよと、告げこし侍りぬ、

かげあさき言の葉かきあつめつゝらんは、なか〳〵におぼつかなきわさなから、さりとていなまんもいかゞあらん、うす霞細々なるは、蚊火のけふりにたき添へ、夏草のしげきは、かりとりて道しるべをし賜はらは、こよなき御情と、ひたふるにねきまゐらするになむ、かしこ。

風前撫子　諸井久良子

たく露もひまなくちりてなでしこの
風にゆらるゝさまあはれなり

曉杜鵑　西川順子

いきたなき夢さませとやほとゝきす
あかつき深きくもになくなり

田家卯花　竹村竹里子

時しらぬ雪と見えけりよもきふの
しづか垣ねに咲ける卯のはな

首夏山　小町谷りえ子

みよし野の花のしら雲あとさえて
あをはすゝしき夏はきにけり

採桑　美奈井芳子

わか園のくはの若葉はもえにけり
こかひの少女今日やつむらん

閑居卯花　矢野うめ子

塵をしもはなれし宿の八重かきに
よそうの花もさきみたれつゝ

山家暮春　仝

まれにきく谷のうくひす聲ふりぬ
春もいつしかくれてゆくらむ

たま〳〵ふるさとにゆきけるに　矢島えい子

古さとのあを葉かくれにもる月を
花のもとにてみまくほしけれ

をしみつる人のこゝろも露しらて
庭のさくらにやとるつきかな

英照皇太后の百日の御祭式をはるかに
拜み奉りて　木川里子

掛卷母綾にかしこき　皇太后陛下には、千代萬代もおはしませと、億兆の民草が祈り奉りしかひもあらせたまはず、過る一月の十一日といふ日に、ときはなる松の青山の宮のそれならで、雲井のよそに神あがり給ひしより照日のくれし日本は、上はかしこき御袖をはじめ奉り、下は刀禰男女の荒妙の袂にいたるまで、いたみ奉る涙いまだかわかぬに、ひまゆく駒の足はやみ、今日は御日數も、百鳥の囀る聲わきてかなしくきこえなされ、風にうちちる櫻花のふぶきにまがふも、昨日諒闇の雪の空れもひ出でられ、情

なき鳥、意なき花も、みな涙の種ならぬはなし、恐くも　天皇皇后兩陛下には、はるゞる御鳳輦を西都にすゝめさせ給ひ、今日の御祭を親しくなさせ給ふともれ承りて、誰かは御大孝のほど感け泣かざるべき、今更に記し奉るもかしこかれど、皇太后陛下には、上下の亂れたる御代に立たせ給ひて、天津日の曇りをはらし給ひ、明治の大御代の基を開かせ給ひし、英明なる先帝を、内に助け給ひ、今上のいまだ御いはけなくましますを御愛み給ひ、御教へ導き給ひ、允文允武なる父帝の御志をあらはし給ふにいたらしめ給ひ、あまつさへ民草を惠み賑はし給ふ御事に御心を注がせ給ふは、古の　光明皇后にもまさらせ給ひ、常に御謙德を守らせ給ひ、天下に母たる人の鑑を示させ給ひし御德のほどは、　稱へ奉らん言の葉もなし。御謚を英照と稱へ奉れるは、陛下の出で給ひし九條家の藤の御紋に因みて、唐土の忠臣何某が詩句よりとり出されて、國母のめでたき御德は、紫にほふ藤花の、ふさやかに民草の潭黛に照り透りて、いともゆかしき所を表はし奉りたるなりとかうけたまはるも、いといとかしこききはみにこそ、妾あやしの賤の身をもかへりみず、遙に都の空を仰ぎて、今日の御式を伏し拜み、御在世を忍び奉るあまり、謹み恐みかくはしるし奉るになん、あなかしこ。

山水の樂

山方壽子

空蟬の世の中に何くれの樂みよろづに多し、さるか中にも今一きは心もうきたつ者は、山水の樂にこそあめれ、風に靡く高峯の雲、遠く流るゝ岩瀬の水、いとさやけし、巳が屋に登りて見わたせど、山々の近きは木立さわやかに別れ、遠きは霞の如く連れるを眺むる時は、自らむすぼゝれたる心もとけぬべく落ちくる水の面には、煩はしき胸もすゝがれぬべし、さるに今一きは樂きは學の窓にとぢこもりて、氣鬱々たる夕、事物の理を考究して、精神を疲勞せしめたる朝、清き山廣き海にさまよひたる其快きこと、いひつくしがたし、されば古より高き山、清き流れの下には、英雄豪傑の出でたるも亦偶然にあらざるなり。一たび足を進めて、山谷のほとりに行く時は、其間近く、大木繁く生ひたる巖をちこちに聳えて、道のさかしき迄さかしく、尾上を見やれは、あるかな

きかに雲霞たなびきて、群れゆく鳥の翼もあきらかなるに、夕日はのかにうつり、水の流一すぢ其源を求むるに幾十里の奥とも分たず、あるは濱のまさごいと淸らかに、さゝら波よる渚あれど、岩をこすなみ高くたちて、音きく計りなるに、舟いたくわづらへるもあり、岸のまに〳〵入り曲りて深き淵となれるもありて、いとをかし、又洋中には恰も胡蝶の如く百ち船の往來するは、西の國との交通をいたさんが爲にして所謂開化の媒船なり。あるは又此山をもて小善小惡の譬、世の諺に塵積りて山となる、また川を以て忍耐の譬にひくは何れも然るべき事にして、之を世の人々の善行惡德の戒となすに足る、其自然の山水の有樣を畫にうつす時は、これ又一種の美術にして、東西何れの國にても盛んに勵み居るところなり。春の景色殘れる雪の處々白く見ゆるに、櫻花香ひ立ちたる夏は、草木生ひ靑色を生じて人わざ靜に心ゆたけし、冬は木々に盡く時ならぬ花をつけたる、秋は萬山さながら血潮の如し、かゝる時にふれては人の心も浮き立て、思ふ友どちを誘ひてあくがれあゆむこそ目の慾を恣にし心をこゝろよくする業なれ。また紅葉はこれ一時の美に若ずと雖も、思ふに感なきにあらず、木葉は春生じて秋死す、其死するに當りて紅色を現はし、人をして之を見せしむ、あゝ我が日本臣民たるものの心掛、まさに斯の如くならずむ、豈此紅葉に對して耻づるあらんのみ。

◎女鑑月並兼題

七月廿日	歌……遠村白雨 文……池蓮	七月十日〆切
八月五日	歌……綠陰散步 文……海邊に遊ふ	七月廿五日〆切
八月廿日	歌……電信 文……團扇	八月十日〆切

歌文原稿は必ず〆切期日迄に本社に到着する樣送らるべし。期日に遲れたるは總て沒書とす。



安藤朴翁畧傳

一、その畧系

○崇光院～～～伏見の宮邦輔親王　崇光院より六代　永祿六年薨五十一

- 惟實　母安藤宗實女　元龜元年卒四十一惟翁と號す
- 定實　母の氏を稱へて安藤滿五耶といふ　慶長十年卒快翁と號す
  - 定朋　新太耶、惺窩の門人、貞淸親王に仕ふ、從六位上右京亮、寛永十四年卒年六十一了翁と號す
- 定爲　新五耶、母河合氏　貞淸親王の子貞致親王に仕ふ朴翁と號す　從五位上内匠頭元祿十五年卒七十六
  - 爲實　初伏見宮に仕ふ、後水戸義公に仕ふ　右兵衛尉
  - 爲章　初爲明新介と稱す
  - 女　要なけれは揭げす

女　男　男　女　女

二、ろの事實

朴翁は、名を定爲といひ、通稱を新五郎といへり。世々丹波の桑田郡千年郷尾口村の人なり。はじめ、朴翁の曾祖なる惟實は、伏見宮邦輔親王の庶子にして、享祿三年に生れたり。母は内藏權頭安藤宗實が娘なり。故ありて宗實が家にて養育せられて、數年の月日を經けり。その頃、鹿苑院の住持に宗山、文山などいへるはみな伏見殿より出でたる由緒あれども、惟實が十餘歳の時に、鹿苑院の弟子に申しこはれけるを、宗實深く惜みて、宮家相續の本意にてうち過ぐしけるに、親王の御嫡子貞康親王生れ給ひしかど、宗實が望も空しくなり、終にかの院の弟子とせらるべきに定まりたり。この時三好氏細川氏と互に黨を結びて相戰ひ、都のうち騷亂頻なりければ、宗實惟實をいざなひて、その所領なる丹波桑田郡に遷り、隱居して亂を避けたり。その頃は世の

中ことに亂れてありけれど、丹州などにても、武士村民のゝ黨を結びて攻め合ひしかど、尾口村を宮村と稱して、敢て侵すものなかりきとぞ。

惟實、幼名は喜多麿呂、名は邦茂のちに惟實に改めたりしが、年老いての後、自惟翁と號しけり。常に詩歌を好み、優游して月日を送り、自ら千年山の八景を撰びて管雲洞、囀月岩、洗耳泉、愛蓮塘、吟雪橋、賞竹徑、嗅梅塢、抱琴園等の名を附け假名の記文を作れり。その文は左の如し。

千年山に八境を題する記　惟翁

みやこをいでゝ十せと餘り一とせのほど、ちとせの山のみねのましらにともなひ、尾口のさとの里人としたしみて、よろづの事のぞむこゝろをやすめ、ひとつのみちさゝらまほしかれど、ひかゝしきはんしやうのあらためがたくて、ひたすら花鳥のいろねにふけり、やうやくねんかのかたくなしきやまひにふけり、猶やむまじき心のすきにや、そこら見そなはして、ふかき洞の戸に隱れては、ぬしなき雲をしるよしにものし、たひらかなる岩ほにうづくまりて、よひゝごとの月にうそぶき、よき泉にけがれたる耳あらふも、かしこかりし人のまねめきてをこがまし。草のしとねにねりゐては、濁にしまぬはちすをあはれみ。あるは、から歌のれもむきも、すゝ

むにやと、谷川の一木橋に雪をながめ。或は、くれ竹のこみちにたゝずみて、心むなしきまじはりを結び。すかはらのおとゞのさのみめでけんも、色にのみはあらづめりと、にはひゆかしく梅かゑをよぢ。あるは、十あまり三の緒をならべて、静なる壺のあめつちを、わがものとなむるも、千年山の名にかなふやまと人とし人はいふめり。されど、かゝるゐなかずま居も、おのれのみかは、ふし見の里の、露にたもとをそぼち、魚の山べのあらしにくしけづり給ふとはつれやもおはしけるぞや。されど、そをまねびとまへ侍るにはあらず。おのづから、竹のそのふにおひたつふしをにくまれ、谷のむもれ木むなしくくちなんも、みづからは心やすくて、中々うれしきさいはひならし。

また、その詩歌の殘れるを年山紀聞にのせられたるは、左の數首なりき。

野遊

碧天連レ野野連レ天。四顧霞晴草色鮮。
莫レ怪孤筇急携レ酒。良晨美景兩難レ全。

山居即事

茅屋柴門枕ニ谷皐一。凭レ欄山靄襲ニ藍袍一。

夜深村落寂無レ聒。一曲瑶琴漢月高。

示二徹禪者一

隣寺穿レ林一徑通。孤筇直到法堂東。
老僧延接煮レ茶話。半日清閑兩腋風。

橘

をりしもあれむかしをみつるうたゝねの
夢のまくらにかをるたちばな

月

なかめやる千さとのほかに雲きえて
秋かせたかくすめる月かけ

すてはてし身にはいとはしなかむれは
老となるてふ夜半の月かけ

雪

しつかにとすみなす宿はとふ人も
れもひたねたる雪そうれしき

題しらす

千とせ山みねのしら雲とちはてね
みやこのつてをきかまくもうし

惟翁常に堆髻にして長鬚、方袖にして、藜杖を曳き、八境を徘徊し、或は近村を遊歩し、或は簑笠をきて、千年川に釣を垂れ、或は藥嚢を懐にして、里民の病あるものに施し、或は松杉栃栗の類を近村所々に植ゑて、久遠の計を爲せり。惟翁はらから多かりしかど、貞康親王の外は、法親王にてぞましましける。元亀元年四月十一日惟翁四十一歳にて卒しぬ。

朴翁の祖父なる定實は、惟翁の子にて、母の氏をもて安藤満五郎と稱せり。人と爲り勇武にして志大なりけるが、父惟翁が卒後、その所領の士人を収めて、出雲村といふに小さき城居を構へ居りしが、この頃織田信長、明智光秀をして丹州をとなへしめしかど、定實防ぎ戰ひしに利わらず、遂に城を棄てゝ走り、丹後に隱るゝこと數年なりき。かくてまた尾口に歸り、自、快翁と號し、慶長十年のころ卒しぬ。

朴翁の父なる定明は、通稱を新太郎といへり。幼より學問に心をよせ、都に上りて、藤原惺窩先生に就てき業を修め、建仁寺の側に住居して、自栖逸を娯みけり。かくて

邦輔親王の御孫なる貞淸親王に召され、從六位上右京亮となれり。されど、その志にはあらざりけり。後疾によりて、位官を辭して尾口村に退り、隱居して、了翁と號し、寛永十四年、年六十一にて卒しぬ。

朴翁は、かゝる家に生れけれど、はやく父には後れけれど、嫡母河合氏いと賢明にして、よく朴翁を勸めはげまし、書を讀ましめける、この時、印本の書世に多からざりしかど、朴翁は、多く手寫して讀みけり。かくて都に上り、冷泉爲景卿につきて經義をたゞし、木下長嘯子(勝俊)につきて和歌を學び、後出でゝ貞淸親王の御子貞致親王に仕へけり。明暦二年、從六位上右京進となれり、その翌年の夏、親王の御姉君、德川家綱の世子なる綱吉の妃とならせ給ひしかど、朴翁之を送りまゐらせて關東に下れり。その翌年、從五位下右京亮となれり。朴翁いと忠實にして氣概あり、親王に仕へて、よく輔佐の道を盡しけり。儒學書跡より、琴、琵琶などの技に至るまで、名ある人を招きて親王の師となし、己も力を盡して之を學び、親王の爲に先導をなしけれど、大に寵愛を蒙りたり。また從五位上內匠頭に上りしが、年五十二の時、上書して、官を辭し、頭をそりて朴翁と號し、名僧どもを訪ひて禪理を問ひ、又名勝などを探りて、常に娛めりしが、かくて我が事もをはりぬ、今よりは祖先の遺風を尋ねんとて、丹波に

歸り、抱翠園の荒れたるをつくろひ修め、常にそのうちを逍遙して日に娯めり。その山家の記にいはく、

山家の記

朴翁居士

千とせ山のふもと抱翠園は、おほぢはじめて隠れすませ給ふ所にして、阿爺につたへて、なほ、庭のたゝずまゐおもしろくすみなし給ふを、此翁またはやうより、後妙莊嚴院の宮にめされ侍りしかど、みつのこみちあれまさりて、久しくうづらの床とゆづり置てしを、みやづかへかへし、世のまじはりたちてのち、更にむかしのいしずゐを、やゝ西にはこびて、かやが軒を、竹のそばぞ、いといぶせけれど、膝をいるゝにたれりとて、容齋と名づく。よものかべに、靖節先生歸隱の圖を、みづからうつし。そのことばを雲竹子にかゝしむ。このひだりにつゞきたる軒に、嘯傲のもじをかゝげて堂の名とし。東軒のもとにといふ詩を書付、みな靜齋公の筆なり。窓のはとりに、明窓淨机筆硯紙墨皆極精良自是人生一樂。といふを板に書たるは、雪蜂といひし朝鮮のはかせなり。たくはふる物、琵琶、琴れの〳〵ひとつ、笛はいさともしくなりてねしもふかねど、すがたのめでたけれど、うちもやらず。文だて、圍碁のせん、からやまとのうつし繪ひとはて、みなかすかなる住居の友とうとまれず。

此所のさま、ちとせ山ひがしによこをれて、松のあらし、うき世の塵をはらひ、白雲しやこの夢をへだつ。南は山祇の森こずゑものふりて、池のみどりもいとふかく、藤浪さへたちかゝりて、やよひのすゑには、さながら、むらさきの雲にはひみちたり。すこしひつじさるのかた一里斗りに、白妙のついぢ高ぐれはぞちにろびねたる、なんよろづ代ふべき亀山の城なり。この見渡さるゝぞ、山里めかすうるさけれど、城市のいそがはしかなるを思ひへるにつけて、翁が心しづかに、世のにごりのがれしよろこびをすゝむるなかだちと、かへりて嬉しきものにながめなしぬ。西には瑞岩の山おろしはげしくて、主人公をよびさまし、千とせ川水たえずして、ゆくものはかくのごとしとさとりぬ。北に竹のはやしみどりをふかめて、春の鳥、夏の風、秋は月に、冬は雪によろしく、四の時なさけすぐさぬすがたをあはれむ。こなたの軒に猗翠の字をかけて、茶室をかまへ、その具をたくはふ、湯のにゆる音、いとにあらず、たけにあらず。かきねのすゝ虫にまがひ、木ずゑの蟬に似たり。ねられぬよひの耳に友なひ、めざむるあしたさらにこゝろも清し。尾口の里はればしまのかどにつゞきたれど、もりわかすかと田の面のいなむしろ、吹しく風をまくらにぞ聞といふにかなへり。此里は、れはぢの御時まで、御母かたのしる所なりしぞ、明智光

秀といふものにかすめられて、のち、領主もうつりかはりたれど、なほふるきよし思ふ人おほくて、此かたゐおきなをもあはれめど、よろづにたよりあしからず。今はむそぢにみちたれど、鬢の霜ふかく、はだへの波よせまされど、ひとみのうるはひさのみにかわかねど、つねにおしまつきにより居て、文をひらき、見ぬ世の人にまじはり、生れぬ時のよしあしをかうがへ、しらぬさかひの海山にさまよひなど、つれ〴〵わぶる事をしらず。ことに先生の集は、むかしよりめなれて、そのみさをゆかしければ、かならずこれを讀なむごとに、あぢはひます〳〵ながうして、翁がおもむきにかなひたれど、先生と翁と、世をことにする事をわすれて、身をあはせたるをおもふ。東光寺淨泉庵は、よるひるとなく來りて、碁うち、ものがたりす。或はいざなひて、かの名付おきたまひし岩ほにのぼれど、谷のひゞき嘯の聲をのこす。洞の戸ばそはくだけたえて、しら雲のみそうつ高き耳あらひ給ひけん泉もあせて、おとかすかなり。池の塘草青ければ、はちすはにほはす。竹のこみち今は民の家ゐとなりぬ。雪をながむる橋はしらも、ながらのためしよそならず。梅の立えは枯れ残れど、鶯もやどりとらず。さてもかの世をさり給ふは、元龜のはじまる年なれど、百とせに十とせ餘りの露霜にやあれにけん。山人さりて曉の猿かなしうといひけんも

れもひいでぬ。園の名をだにむなしうなさじと、御忌日四月十一日ごとに、かならず琴を志らべて、御樂にそなふ。今さへかゝれは、後々の子孫は、いつこそのほどといふ事をもわきまへ志らじと、つたなき筆にうつし、家にも傳はれとて

千とせ山八のさかひをうつし繪の
　　これたにのこれとふ人のため

とぞいふ。もし川かげのとやかに、風やはらかなるをりは、智證大師、千とせの末もとよみし寺院の跡をゝがみて、はやく法の水のたゝにしをいぶかり。聖海上人なみだれとしけん宮居に詣て、ゝろの駒犬をたつぬ。あるひはすそわの田井に根芹を摘み、沼の淺みにひしを拾ひ、しげき木陰にくさひらをかり、清き流に竿をなげ。もしは國分寺をとぶらひて、禪門の商量をはげみ、愛太子の峯をよぢて、教乘の議論をいどむ。れはよそこの山ずみのたのしみ、あめつちのわひだに、またたくふ人あらじと、みづからたれりとし、ひとりほこりて餘年を雲水にはふらかし、すみやかに筆と同じく朽なん事をわまなふ。時に、貞享三のとし卯月三日の夜、隱士朴翁ねざめのまくらをもたげてしるしをはりぬ。

かくて、二人の男子、爲實、(一に爲誠)爲章は、父とともに儒學を修めしが、父の祿をもて、伏見

宮に仕へたりしが、後二人ともに、西山義公の召に應して水戸に赴き彰考館の寄人となり。大日本史、禮儀類典などの撰修にあづかれり。爲實は祿七百石を賜り、爲章は三百石を賜れり。爲實は右兵衛尉となり、素軒と號し、博學にして、最國典に通じたり。史館總裁となりぬ。爲章は國學を好み、詠歌は中院內府通茂卿に學びたり。かく二人は、水戸にて重うせられてありしかど、朴翁もその有樣をも見まほしうて元祿十年に旅だちし、水戸に遊びたるなり。これこの常陸帶の出できたるもとなり。西山公かつて、朴翁に贈られし文あり。こゝにかゝぐ、

隱士朴翁に贈ることゞ　　西山公

我家に、隱君の曾祖長松軒の書給ふ八境の記を、うつしもつ事とし久し。つねにそのことゞものうるはしきを賞し、その文字のさだかならぬを憂ふ。此ごろ、かの眞蹟を、隱君よりつたへかりて、もとより持ちしとあはせ校るに、日ごろよみときがたかりし文字、はやくこゝろを得たり、よろこび思ふ事かぎりなし。今ぞ眞蹟を返しれくるに、たゞにもたさんも無下なれぞとて、こしをれひとつ事付て、その山ひこの笑を遺す。

はるかにもあふぎこそ見れ千年山
山としたかき君かみさをを

朴翁は、水戸より還りて後五年、元祿十五年、七十六歳にて卒しぬ。嘗て晋の陶靖節が人と爲りを慕ひその文集を讀み、優遊して山水を樂むこと凡十八年なりき。前妻山田氏は爲實、爲章、女二人を生みて、朴翁に先ち卒したり。後妻湯川氏にも三男二女ありきとぞ。

爲章は初は爲明といひ、通稱を新介といへり、年山はその號なり。西山公、僧契冲に萬葉集の註を求めたまふに及びて、命をうけ、屢、浪花に到りて、其の説をうく、されど、契冲のことを能く知り、その行實をあらはして、年山打聞(又紀聞ともいふ)にのせたり。凡此の打聞の中におさむる所をもて、其の學術もその人となりの温恭もはかりしらる。又紫女七論を著して、式部の賢操才秀を褒め、源氏物語の大意をもくはしく論ず。尤稱すべきは、家祿をましたまはらんの命ありしとき、子なきを以て辭し、竟に他姓を養はず。身歿して、家亦絶ねたりとなん。人のなしかたき所にして、吾が分に安ずるの義、稱すべし。(兄の家は水戸に今猶ありて其の子孫相續すといふ。)享保元年十月歿す、年五十八。

忍艸のれくに
おのふくさ露のかくてもれもひきや
またうゑそへて袖ぬれんとは

彰考別館紅葉の宴詩歌の序（文略）

萬代につたへててらせもみちはの
　色もはねわるのきの光を

西山公江戸へ赴かせ給ふを送り奉る和歌（五首の内）○（元祿七年の書なり）

一すちにいのることゝろのまことをは
　みちのちまたの神もうけすや

以上の事實は、近世畸人傳、近世叢語、年山紀聞、古學小傳なぜによりて記しぬ。なはもれたれもあるべし、そは博學のひとの敎をこひねかふになん。

明治三十年七月五日　　女鑑編者しるす

工藤武重謹著

孝明天皇御遺德

先帝御製（東久世伯染筆）挿入　全一冊定價金二十五錢　郵税金四錢

恭て按ずるに先朝　孝明天皇は曠古の明君なり不幸にして**事蹟**尙湮晦に屬し**聖德**未だ外に露れず是れ頗る憾むべしと爲す此書は宸翰秘書及び先朝に奉仕せし雲客月卿諸官人の**實歷談**に依り以て汎く**逸事遺聞**を網羅したるものにして庶幾くは聖德の萬一を發揮し奉ることを得たりと信ず

今此書の一班を示せば先づ**御一代**の章を掲げ編年體を以て降誕より崩御に至るまでの事迹を示し**聰明**の章に於て　先皇の英明絶倫なるを概說し**夙成**の章は御幼時の御言行を示し**慷慨**の上編は醜夷掃攘の事に痛く　叡慮を惱されたる事、其下編は皇權回復の事蹟を敍し**孤憤**の章は獨り至尊をして社稷を憂へしむの實情を寫す**撫御**は識見卓出の實際を明にし**豁達**は言路洞開の聖德を輝かし**忍耐**は襟裡荒廢供御菲薄にして或は十兩以下の御座用金に窮し給へる等の例證を示し**仁愛**は惻隱仁恕の御心甚た厚かりしを明にす、而して前數章に配置する能はさりし逸事遺聞は總て之を**雜事**の一章に網羅し以て　先帝の聖德を頌し奉る

東京京橋區築地二丁目廿一番地

發行所　國光社

國光社譯述

獨逸讀本抄譯

獨逸は、教育の最も普及せる國なり、學問の國なり、實業の國なり、教育の主義は彼我國情を異にするも、教科書たる事實の撰擇、序述の文體等、其方法に屬する者に至りては、**玉を琢くの好資料**となすへき者多からんとて、熱心忠實なる教育者諸君は、獨逸讀本の譯述を促せし事、一再にして止まらず、本社も亦斯道の暢發を以て自ら任ずる者なり、豈他山の石たるを期せさらん、寸毫たも國家を裨補せん事、轉輾忘るゝ能はさる所、要勞敢て辭する所にあらず、されは、本書は、獨逸最近の讀本を渉獵し、**粋を拔き、精を撰び**、勉めて**原文の眞義を發揮**するを主として、抄譯したる者なり、教育者諸君之を得て**座右の好參考**に供すべく、學生諸君之を得て**朝夕の好良友**となすべく、彼の國**教育の實質を窺知するに於て、百千部の教育說心理論に優れること萬々なり**、若夫れ文の流暢にして趣味多きや否哉、事實の新奇にして實際を遠さからざるや否哉、少年文書か如何に發達せるや否やは讀まん者よく知得べければ、略しつ、

定價金貳拾錢
郵稅金四錢

東京京橋區築地二丁目二十一番地
發行所 國光社

題辭樞密院副議長從二位東久世通禧伯●仝樞密院顧問官從二位勝安房伯●序文從二位松方正義伯●仝從二位品川彌二郎子●仝内務大臣從二位野村靖子●仝大藏大臣從二位渡邊國武子●仝貴族院議員正四位富田鐵之助君●仝農商務次官從四位金子堅太郎君●仝樞密院書記官長正五位平田東助君●仝日本銀行總裁從四位川田小一郎男●獨逸國大博士ウヰルヘルム、ロッシエル氏著●子爵品川彌二郎君校閲●平田東助君●平塚定次郎君●武内常太郎君●湯川寛吉君共譯

商工經濟論

再版

上編 代價壹圓四十錢

下編 同 壹圓二十錢

二册 郵稅金三十八錢

ロッシエル先生の經濟學に於ける固より天下の定評あり本社敢て一言を贅せず先きに全國實業家並に學者の渇望に副ひ全部出版の成を告ぐるや直ちに初版を賣盡し今や再版發賣するに至れり本書上下二編二千頁に及ぶ大部のものにして其全文飜譯の精到なる一字を漏省せし處なし戰後の經濟に處して大に商工業發達進歩の點に心を致し力を盡くさんとするの君子此書を讀まずして何の書をか讀まむ

商工經濟論上編目次

同下編目次

東京市京橋區築地二丁目廿一番地
發行所 國光社

日本赤十字

第五十一號
七月十五日發行
定價一部金八錢
全國無遞送料

六册前金四拾五錢
十二册前金八拾六錢全國無遞送料

本誌は日本赤十字社の機關として唯一の雜誌なり●本誌は本號より大に面目を一新し益々赤十字事業の普及發達を翼賛せん事を期す●本誌の記事は斯業に關する直接の事項の外軍事教育慈善衛生實業文學等其他間接の關係を有する事項を網羅す●本誌は單に本社員のみならず軍人學生教育家實業家等の必讀すべき良雜誌なり

發行所

東京京橋區築地二丁目二十一番地

日本赤十字發行所

女鑑第百三十五號目錄

社告

○代價は通貨又は郵便爲替小爲替銀行爲替及通運にて本社へ御直送之事○郵便爲替は東京銀座郵便取扱所へ御振込可被下事○郵劵を以て代金に換用せらるゝ時は一割増の事○別に領收證を出さす金員領收の上は直に女鑑を發送すべし若強ひて領收證を要せらるゝ者は別に證書郵送料送附の事○未納税の來書は一切受取不申候事

女鑑

毎月五日廿日發行

定價		廣告料
一册	十錢	五號活字廿三字詰一行金二十錢
六册前金(三ヶ月分)	五十五錢	
十二册前金(半年分)	壹圓	
全國無遞送料		

明治三十年七月四日印刷
同　年七月五日發行

東京京橋區築地二丁目二十一番地
編輯兼發行人　川崎直衛

東京京橋區南八丁堀一丁目十一番地
印刷人　並木艮雄

東京京橋區築地二丁目二十一番地
發行所(電話番號本局八八)　國光社

(印刷所　東京國光社印刷所)

(明治二十四年八月四日內務省許可
明治二十五年三月十二日遞信省認可)